

4 首都圏の大学と連携した首都圏の若者との交流推進調査

実施計画

）開催体制

主催：青森県（下北地域県民局地域連携部地域支援室） 担当者：富谷 正行
国土交通省東北地方整備局
むつ青年会議所

協力：(財)地域開発研究所 担当者：牧瀬 稔
下北ブランド研究開発センター、下北ブランド開発推進協議会
むつ市、東通村、大間町、風間浦村、佐井村
法政大学、立正大学、高崎経済大学

）開催目的

・省略（資料参照）

）実施内容

・省略（資料参照）

）実施日時・時間・開催場所

・省略（資料参照）

- | | |
|----------|--|
| 1～2月 | 下北地域における交流人口の基礎調査
下北地域のイメージ把握（ヒアリング&観光周遊プランの提起） |
| 2月16～23日 | 「下北観光周遊プラン」提案のための実態調査（滞在調査） |
| 2月16日（土） | 移動日（東京→下北） |
| 17日（日） | 「下北検定」の受検 |
| 18日（月） | 交流創出事業（別紙）の実施 |
| 19日（火） | 交流創出事業（別紙）の実施 |
| 20日（水） | 下北かるた体験ツアー（別紙） |
| 21日（木） | 宿泊施設で資料づくり（翌日発表会） |
| 22日（金） | 午前：発表会（シンポジウム）：下北
→（仮）「いくべし下北」発表会
午後：下北フォーラムにスタッフとして参加 |
| 23日（土） | 移動日（下北→東京） |
| 3月16日～ | 発表会（シンポジウム）：首都圏（少なくとも25日までに開催）
→（仮）「いくべし下北」発表会 |
| 3月末 | 報告書の作成 |

）交流推進調査及び開催シンポジウムの参加者等

交流推進調査の参加者

- ・法政大学、立正大学、高崎経済大学の学生15名＋指導教官3名（牧瀬ほか）
- 下北地域シンポジウム（学習発表会）
- ・講演者・アドバイザー：未定（候補はピックアップ）

- ・参加者：地域住民、下北検定受験者、かるたコンテスト参加者、国・県・市町村職員、首都圏大学生、各種団体など

首都圏シンポジウム（学習発表会）

- ・講演者・アドバイザー：未定（候補はピックアップ）

- ・参加者：未定（候補はピックアップ）

）その他

実施スケジュール（案）

1～2月

下北地域における交流人口の基礎調査：交流推進調査

下北地域のイメージ把握（ヒアリング&観光周遊プランの提起）：交流推進調査

1月26日（土曜日） 第1回全体会議（準備・2週間）

2月初旬（4日の週） 交流推進調査・シンポ内容等確定
関係者へのシナリオ等連絡

2月16～23日 「下北観光周遊プラン」提案のための実態調査：交流推進調査

2月22日（金曜日） 下北シンポ開催

3月16日～ 首都圏シンポ開催

3月下旬 成果とりまとめ

広報・案内

- ・省略

必要作業と担当者

- ・省略

1 交流創出事業の背景

今日、多くの地方自治体が地域づくりの現場に大学生の意見を取り入れようとしている。一例として、愛知県は「学生提案型地域づくりモデル事業」を実施している。また地方自治体と大学が包括協定を結ぶことにより、大学生との連携を構築し、地域づくりを進めている事例も少なくない。しかしながら、今日進められているこれらの事業には、次の3点の問題点がある。

地域づくりに参加する大学生が地方自治体の区域内の居住者に限定される傾向が強い（あるいは近隣の地方自治体に居住している）外部の視点が欠如している。

地方自治体と大学の「包括協定」は、包括協定先の大学という限られた連携となるため、多面的な広がりをみせていない。なお、包括協定の多くが地方自治体の区域内にある大学との協定である。

大学生は地方自治体に対し、地域づくりを提案するが、「提案だけに終始」し、能動的な地域づくりに発展しない。ある一時に事業を実施しただけに終始し、持続的な活動に進まない。

そこで「首都圏の大学と連携した若者との交流創出事業」（以下「交流創出事業」という）は、青森県下北地域（むつ市と下北郡（東通村、風間浦村、大間町、佐井村）の市町村）とは「関係のない首都圏の大学生」という外部者の観点から、「冬」に首都圏の若者層を下北地域に呼び寄せるために必要なコンテンツを発掘していくための調査を実施する。そして、2008年8月には青森県の事業として、「夏」に首都圏の若者層を下北地域に呼び寄せるための同様な調査を実施する。

この「冬」と「夏」に同様な調査を実施することにより、下北地域を横断的・総合的に捉えることが可能となる。なお原則として、2007年2月と2008年3月は、同じ大学生により調査を進める。

今回の特徴として、提案されたプランの「実現化を見据えた」調査という点があげられる。今回実施する調査により得られた知見・成果（提案内容）は、旅行会社や行政等が実現化するように働きかけていく。

2 交流創出事業の目的

地域を活性化していく視点には、「よそ者」「わか者」「ばか者」という3つの要素があると言われていいる。ここで言う「ばか者」という表記は誤解を与えるが、交流創出事業では、「地域のしがらみにとらわれない斬新な視点を持った者」と捉えている。そして、この3つの要素をすべて兼ね備えているのが、「首都圏の大学生」である。

交流創出事業は、首都圏の大学生が「首都圏の若者層を下北地域に呼び寄せるため」の調査を実施する。特に「冬」という季節に特化し、下北地域の「冬」を若年層に売込み、若年層に受入れられる観光周遊プランを提案することが目的である。

具体的な交流創出事業としては、大学生は2008年2月から3月にかけて、下北地域に1～2週間ほど滞在し、「下北地域を首都圏の若者層に売り込んでいくためのコンテンツは何か」「どのような手段で下北地域を首都圏の若者層に提案していくか」等の視点から、グループ毎に調査を実施する。

その後、調査結果は、下北地域と首都圏（何れも場所は未定）において発表会（シンポジウム）を開催する。そして発表会を経て、大学生が提案した企画案を加筆・修正し、旅行会社や行政等に企画案を

提示する。旅行会社や行政等は、その企画案を実現化するという流れとなる。

そして、これらの一連の交流創出事業を報告書としてまとめ、2008年8月に実施する「夏」の同様な調査に反映させていく。

3 交流創出事業の内容

対象とする大学生は、首都圏にある慶應義塾大学（長田進・准教授）、法政大学（牧瀬稔・兼任講師）、立正大学（片柳勉・准教授／高木亨・非常勤講師）を想定している。なお、法政大学の大学生は、既に2007年12月に下北地域を訪れ、青森県下北地域県民局が進めている「『下北』ブランド構築による地域活性化戦略策定調査」のための、小学生低学年を対象としたワークショップにファシリテーターとして参画している。

交流創出事業の内容は下記のとおりである。

（１）下北地域における交流人口の基礎調査（１月～２月）

交流創出事業は、大学生という「よそ者」「わか者」「ばか者」という視点から、下北地域が若者層に受入れられる観光周遊プランを提案することが目的である。特に、今回は下北地域における「冬」の観光資源を発見し、それらを若年層に受入れられるように、大学生の視点から発見・加工することが目的である。

この具体的な成果（企画案）を提示する前に、既存の資料を中心に下北地域の交流人口の現状について把握する。なお、この調査は大学生が担当教授（指導教授）の指導のもと進めていくが、民間調査会社の協力を得て、首都圏の若年層を対象とした「下北地域の観光資源の魅力を問うアンケート調査」（仮称）を実施する。

（２）下北地域のイメージの把握（１月～２月）

「下北」や「下北地域」「下北半島」という言葉が持つイメージを把握することにより、下北地域は「何によって観光振興をはかっていけばいいのか」が明らかになる。

このイメージは、既に「『下北』ブランド構築による地域活性化戦略策定調査」の中でアンケート調査によって、定量的に把握されている。そこで今回は、大学生が若年層を対象にヒアリング調査を実施し、下北地域のイメージを定性的に把握していく。

またヒアリング調査を進めるうえで、下北地域と他地域とのブランドポジションも比較する。つまり、下北地域に類似した他の観光地の中で、下北地域はどのようなイメージ戦略を立てて観光振興をはかっていけばいいのかを明らかにする。

交流創出事業では若年層（観光客）の持つ下北のイメージを明らかにし、そのイメージを活用し、下北地域が観光振興を進めていくための観光周遊プランを提起する。

（３）「下北観光周遊プラン」提案のための実態調査（２月～３月）

（１）と（２）の首都圏での調査結果を土台に、下北地域における「若者の若者による若者のための下北観光周遊プラン」を提案するための実態調査を、実際に下北地域を訪れ進めていく。その際、下北地域県民局をはじめ 当地域の事業者等の協力を得る。

この調査は、提案した企画案の「実現化を見据えた」調査である。この調査により、導出された企画

(４)(仮称)「いくべし下北」「くるべし下北」発表会の開催

この発表会には、専門家や実務家を招き、大学生が提案した企画案に対し、意見・コメントをいただく。それらを受けて企画案をブラッシュアップしていく。

4 調査研究スケジュール

	2008年			
作業内容	1月	2月	3月	
(1) 下北地域における交流人口の基礎調査				首都圏での作業
(2) 下北地域のイメージの把握				首都圏での作業
(3) 「下北観光周遊プラン」提案のための実態調査				下北地域での作業、1～2週間を想定している
(4) (仮称)「いくべし下北」「くるべし下北」				首都圏と下北地域で各1回
(5) 報告書の作成				財団法人地域開発研究所の作業
(6) 交流創出事業を進めるための打ち合わせ				

専門分野は、都市地理学、経済地理学である。主な論文に、「「まちあるき」を題材としたカリキュラム編成の実験」慶應義塾大学日吉紀要「社会科学」Vol.17（2007年）、「都市圏設定に関する一考察—日本・アメリカ合衆国・英国の定義を比較する」慶應義塾大学日吉紀要「社会科学」Vol.17 pp.15-28（2006

年) などがある。

牧瀬稔・法政大学社会学部兼任講師 / 同大学大学院政策科学研究科兼任講師

法政大学大学院人間社会研究科博士課程修了により「博士(人間福祉)」を取得。民間シンクタンクを経て、横須賀市都市政策研究所、財団法人日本都市センター研究室を経て、財団法人地域開発研究所研究部に研究員として勤務している。

専門分野は、行政学、政策科学、まちづくりである。主な論文に、「檜原村のブランド化に向けた取り組み」財団法人日本開発センター『地域開発 vol. 514』(2007)、「団塊の世代による安全安心活動の活性化」財団法人日本都市センター『団塊世代の地域参画 - コミュニティの再生を目指して - 』(2007 年) などがある。2004 年 10 月には財団法人松下政経塾より塾長賞を受賞している。URL: http://homepage3.nifty.com/makise_minoru/

片柳勉・立正大学地球環境科学部地理学科准教授

立正大学大学院地球環境科学研究科地理空間システム専攻修了により、「博士(地理学)」を取得。現在、立正大学地球環境学部地理学科准教授である。

専門分野は、人文地理学、都市計画・建築計画である。主な論文に、「市町村合併と都市の構造」『都市問題』(2003)、「歴史的町並みの保全と認識の変化 - 長野県須坂市を事例として - 」『地球環境研究』(2003)、「大学地理学教育における海外巡検の意義 - イギリス巡検を通じて - 」『地域研究』などがある。

高木亨・立正大学地球環境科学部地理学科非常勤講師

立正大学大学院地球環境科学研究科地理空間システム専攻修了により、「博士(地理学)」を取得。現在、立正大学地球環境学部地理学科非常勤講師(「日本の地誌」「工業地理学」等担当)、高崎経済大学経済学部非常勤講師(「人文地理学」「自然地理学」担当)、財団法人地域開発研究所研究部客員研究員を兼ねている。

専門分野は地理学、地域研究、人文地理学である。主な論文に、主な研究業績として、「第二次世界大戦前の金沢市大野町における醤油産地の展開過程」(2006 年)、「醤油の好みと地域性」(2005 年)、「生産と流通からみた日本の醤油醸造業と醤油嗜好の地域性」(2005 年) などがある。

実施結果

【概要】

1. 本調査の背景

今日、多くの地方自治体が地域づくりの現場に大学生の意見を取り入れようとしている。一例として、愛知県は「学生提案型地域づくりモデル事業」を実施している。また地方自治体と大学が包括協定を結ぶことにより、大学生との連携を構築し、地域づくりを進めている事例も少なくない。しかしながら、今日進められているこれらの事業には、次の3点の問題点がある。

地域づくりに参加する大学生が地方自治体の区域内の居住者に限定される傾向が強いため（あるいは近隣の地方自治体に居住している）、外部の視点が欠如している。

地方自治体と大学の「包括協定」は、包括協定先の大学という限られた連携となるため、多面的な広がりをみせていない。なお、包括協定の多くが地方自治体の区域内にある大学との協定である。

大学生は地方自治体に対し、地域づくりを提案するが、「提案だけに終始」し、能動的な地域づくりに発展しない。ある一時に事業を実施しただけに終始し、持続的な活動に進まない。

そこで「首都圏の大学と連携した首都圏若者との交流推進調査」は、青森県下北地域（むつ市と下北郡（東通村、風間浦村、大間町、佐井村）の町村）とは「関係のない首都圏の大学生」という外部者の観点から、「冬」に首都圏の若者層を下北地域に呼び寄せるために必要なコンテンツを発掘していくための調査を実施する。

2. 本調査の目的

地域を活性化していく視点には、「よそ者」「わか者」「ばか者」という3つの要素があると言われている。ここで言う「ばか者」という表記は誤解を与えるが、交流創出事業では、「地域のしがらみにとらわれないう斬新な視点を持った者」と捉えている。そして、この3つの要素をすべて兼ね備えているのが、「首都圏の大学生」である。

交流創出事業は、首都圏の大学生が「首都圏の若者層を下北地域に呼び寄せるため」の調査を実施する。特に「冬」という季節に特化し、下北地域の「冬」を若年層に売込み、若年層に受入れられる観光周遊プランを提案することが目的である。

具体的な交流創出事業としては、大学生は2008年2月から3月にかけて、下北地域に1～2週間ほど滞在し、「下北地域を首都圏の若者層に売り込んでいくためのコンテンツは何か」「どのような手段で下北地域を首都圏の若者層に提案していくか」等の視点から、グループ毎に調査を実施する。

その後、調査結果は、下北地域と首都圏（何れも場所は未定）において発表会（シンポジウム）を開催する。そして発表会において、下北地域の利害関係者から、意見・コメントを得て、調査の精度を高めていく。

【詳細】

1. 下北地域における交流人口の基礎調査

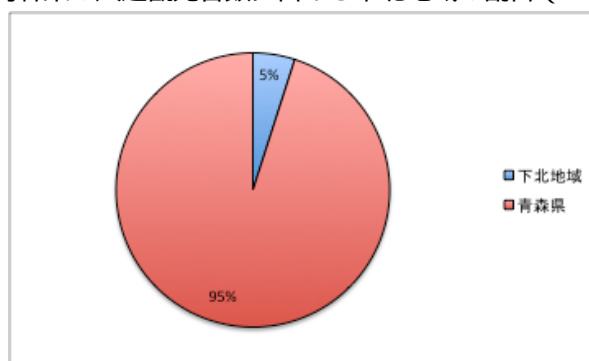
1) 青森県における下北地域の観光入り込み客数の推移と現状

下北半島¹は観光資源の宝庫である。例えば、北限のゲンジボタルの生息地でもある下北半島は海や山の自然に恵まれた半島として有名である。

景勝地としては、尻屋崎（東通村） 仏ヶ浦（佐井村） 恐山（むつ市） 薬研溪流（むつ市大畑町） 川内川溪流（むつ市川内町）等があり、名所としては、大間崎（大間町） 願掛け岩（佐井村） 縫道石山（佐井村） 釜臥山展望台（むつ市）等がある。以下では、下北半島の特徴として捉えることのできる観光について、平成 18 年青森県観光統計概要のデータを元に概観する。

下北地域は、2006 年度青森県入込観光客数 4,741 万人のうちの約 5%にあたる 247 万人が訪れた（図表 1-1）。弘前市（734.1 万人）や青森市（597.5 万人）・八戸市（544.5 万人）・十和田市（369 万人）などと比較すると、入込数は少ない。

図表 1-1 青森県の入込観光客数に占める下北地域の割合（2006 年）

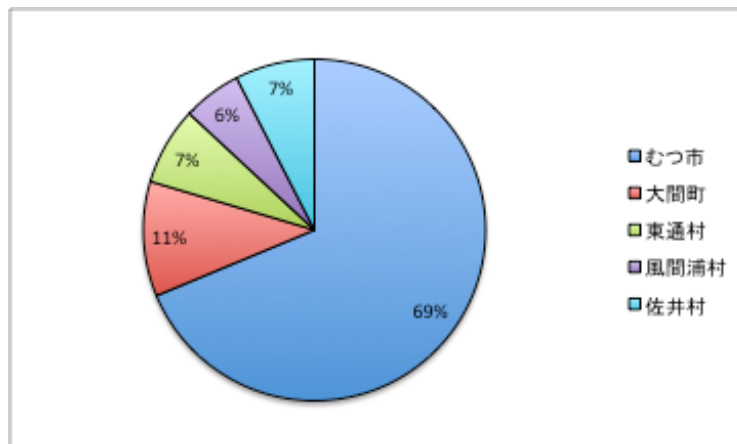


資料：平成 18 年青森県観光統計概要

下北地域内での入り込み観光客数の割合を見ると図表 1-2 のようになる。69%をむつ市が占め、次いで大間町（11%）、東通村と佐井村が同じ 7%であり、風間浦村（6%）の順となっている。むつ市は、全国的に有名な恐山を市域に含み、旧大畑町、川内町、脇野沢村を合併したことで、多くの宿泊施設があることなどにより下北地域内での観光拠点となっているといえる。

¹ 本報告書における下北地域及び下北半島は、むつ市と下北郡（東通村、風間浦村、大間町、佐井村）の町村をいう。

図表 1-2 下北地域市町村別入込観光客数の割合（2006 年）

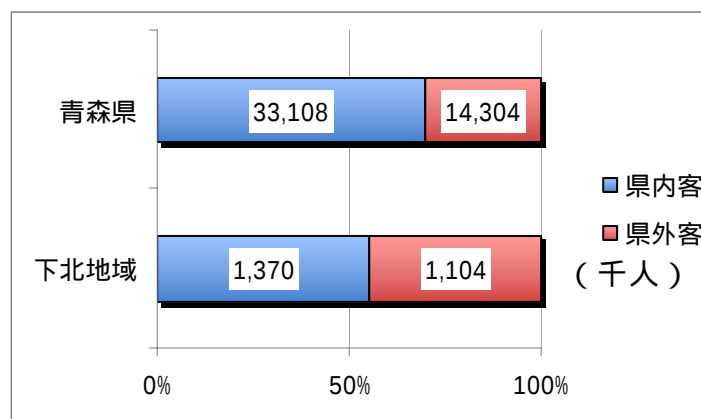


資料：平成 18 年青森県観光統計概要

青森県全体の観光客は、70%が県内客であり、30%が県外客となっている。下北地域では県内客が 55%、県外客が 45%となっている（図表 1-3）。

下北地域を青森県と比較すると、下北地域は県外客の割合が若干高くなっている。県内客が観光客の中心ではあるが、県外客を呼び込んでいる地域であるといえる。

図表 1-3 青森県と下北地域での県内・県外観光客の割合



資料：平成 18 年青森県観光統計概要

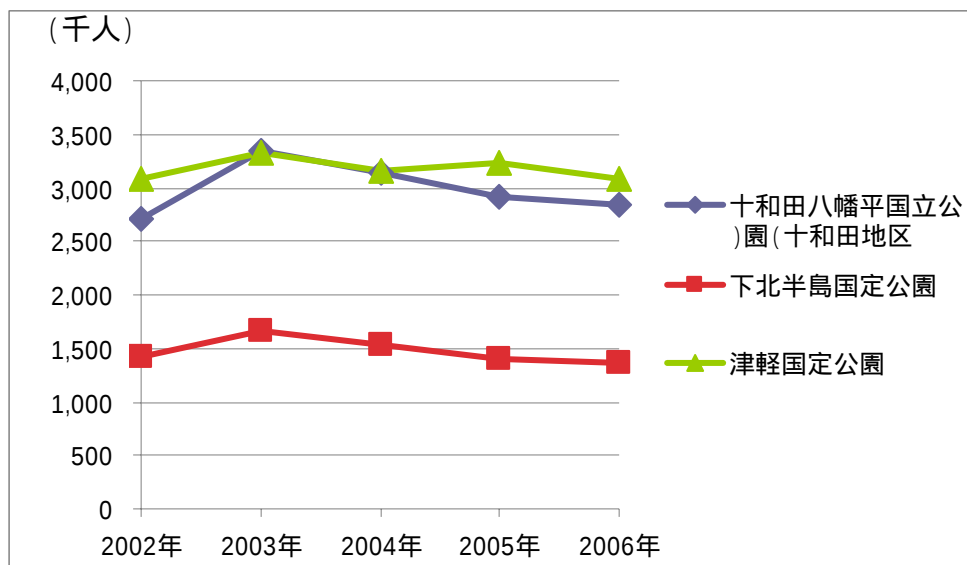
青森県にある十和田八幡平国立公園（十和田地区）と津軽国立公園・下北半島国立公園の入込み観光客数の推移を比較する。国立公園と津軽国立公園が年間 300 万人前後で推移しているのに対し、下北半島国立公園は 150 万人前後と前二者の半数程度となっている。

2003 年の新幹線八戸開業により、各公園とも多くの観光客が訪れている。2002 年と 2003 年と比較すると、十和田八幡平国立公園で 121%、津軽国立公園で 108%、下北半島国立公園でも 116%の増加となっている。しかしながら、開業効果は長続きせず各公園とも 2003 年がピークとなっている。

2003 年と 2006 年の比較では、十和田八幡平国立公園が 85%、津軽国立公園が 92%の減少に対して、下北半島国立公園は 82%と大きく減少している。下北半島国立公園の減少幅が目立つ結果となった（図

表 1-4)

図表 1-4 青森県内の国立・国定公園入込観光客数の推移 (2002-2005 年)



資料:平成 18 年青森県観光統計概要

2) 下北地域を訪れる観光レクリエーション客の属性と意向(訪問理由等)

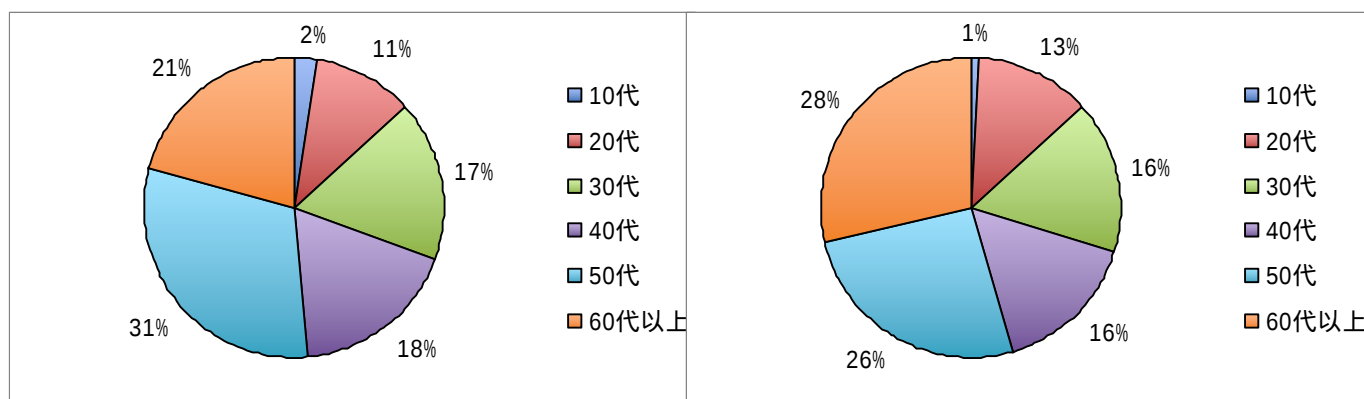
青森県を訪れる県外からの観光客の年代を見ると、半数以上の 52%が 50 歳以上の世代となっている(図表 1・5、イ)。一番多い世代は 50 歳代であり、その割合は 31%となっている。その一方で 20 代以下は 13%と少ない。また、30~40 代は 35%となっている。

下北地域では、50 歳以上の割合はさらに高く、全体の 54%を占めている。また最も多い世代は 60 歳代以上であり、28%となっている。一方で、20 歳代以下の占める割合は 14%であり、県全体よりも高いものの、全体に占める割合は低くなっている。30~40 代も 32%と県全体よりも低くなっている。

図表 1- 5 青森県と下北地域の年代別県外観光客の割合（2006 年）

イ）青森県

ロ）下北地域



資料：平成 18 年観光レクリエーション客実態調査

このことから、下北地域を訪れる県外からの観光客は、50 代以上の世代が中心であるといえる。また、北東北三県観光立県推進協議会「北東北三県文化観光振興アクションプラン」によると、青森県を訪問する観光客層は「子育て後の夫婦旅行」が最も多いという結果となっている（http://www.north-tohoku.gr.jp/action_plan/）。

特に高齢者層が青森県に訪問している傾向が顕著になっている。この層はほとんどかわらない状況で推移しており、今後も、この層が青森県を訪問する傾向はかわらないと思われる。

3）下北地域に対する交流促進ターゲット（若年層・大学生世代のニーズ）

しかしながら、下北地域を訪れる観光客数は頭打ちの状況である。今後の少子高齢社会を考えると、50 代以上の世代を中心とする観光では、減少傾向に歯止めをかけることは難しく、それ以下の世代にも客層を広げていく必要があるといえる。

そこで、本調査では県外からの観光客を確保し、観光客層を広げるために、若年層をターゲットとした観光プログラムの提案をおこなう。

本調査の対象層を若年層（若者）とした理由は、以下の 3 点ある。

下北半島を訪れる高齢者層は、今後も一定の数を見込める。そこで、その高齢者層に「上乘せ」する意味を込めて、若年層（若者）に焦点をあてた。

若年層（若者）は下北半島に対して、ほとんどイメージを持っていないと考えられる。実際、本ニーズ調査を実施する前後の大学生を対象としたヒアリングでは、その傾向を捉えることができた。そこで、その若年層（若者）の意識を把握し、新たな下北半島の観光ニーズを確立していくための基礎資料とする。

しばしば地域の活性化には「若者」「よそ者」「馬鹿者」などの視点が必要と言われる。これらのすべての要素を持つ若年層（若者）から捉えた下北半島の活性化のヒントを得るためである。

2. 下北地域のイメージ把握

1) ニーズ調査（地域住民、観光客、首都圏大学生）の対象及び手法の整理・提案

ニーズ調査の対象

本調査では、若年層に視点を置くため、ニーズ調査の対象を下記のように設定した。

- ・ 地域住民 = 下北地域内の高等学校生徒（3年生）
- ・ 首都圏大学生（主に1・2年生）
- ・ 観光客 = 首都圏大学生・引率教員

ニーズ調査の手法

各調査対象のニーズを把握するために、下記のような調査手法を用いた。

- ・ 高等学校生徒に対しては、ニーズに対するアンケート調査を実施した。調査を実施した高等学校は以下の通りである。青森県立田名部高等学校、青森県立大湊高等学校、青森県立むつ工業高等学校、青森県立川内高等学校、青森県立大畑高等学校、青森県立大間高等学校の協力を得た。なお回収数は357高校生である。
- ・ 首都圏大学生に対しては、まず、法政大学社会学部で開講されている「地方自治論」「行政法」「地域政策論」に加え、立正大学地球環境科学部の「地域文化論」と高崎経済大学経済学部の「自然地理学」の受講学生に対してアンケート調査票を配付し、授業内で回収した。なお回収数は252大学生である。
- ・ その後、法政大学学生8名、立正大学学生3名、高崎経済大学学生1名の合計12名による滞在調査をおこなった。
- ・ さらに、滞在調査実施後に、一般向けのアンケート調査も実施した。
- ・ 引率教員に対しては、学生とともに滞在調査をおこなった後、一般向けアンケート調査を実施した。

2) ニーズ調査票作成、調査実施及び調査結果とりまとめ

ニーズ調査票ほか

・高校生対象アンケート（地域住民）

下北地域のニーズ調査アンケート（高校生）							
性別	居住地						
男 ・ 女	市 ・ 町 ・ 村						
問1) 下北半島のイメージについて、下記の中から項目ごとに、1つに○をつけてください。							
○印象	【明るい】	1	2	3	4	5	【暗い】
○先進性	【新しい】	1	2	3	4	5	【古い】
○年齢	【若い】	1	2	3	4	5	【高齢】
○地域のイメージ	【癒し】	1	2	3	4	5	【せっかち】
○産業	サービス業	工業		農漁業			
問2) 下北地域の好きなところを自由にお書きください。							
()							

・首都圏大学生対象アンケート

下北地域のニーズ調査アンケート（大学生）							
性別： 男 ・ 女	居住都県： 都 ・ 県						
年齢： 歳	出身地： 都・道・府・県						
問1) 下北半島のイメージについて、下記の中から項目ごとに、1つに○をつけてください。							
○印象	【明るい】	1	2	3	4	5	【暗い】
○先進性	【新しい】	1	2	3	4	5	【古い】
○年齢	【若い】	1	2	3	4	5	【高齢】
○地域のイメージ	【癒し】	1	2	3	4	5	【せっかち】
○産業	サービス業	工業		農漁業			
問2) あなたが下北半島に行くとしたら、どのような商品やサービスがあったらいいと思いますか。自由に記述してください。							
()							

・滞在調査

ラリー体験者に対し、下記の設問項目を回答してもらう。

1. 今回の「かるたラリー」について、よかった点を具体的にお書きください。
2. 今回の「かるたラリー」について、改善点を具体的にお書きください。
3. 「かるたラリー」の観光資源としての可能性について、具体的にお書きください。
4. 「かるたラリー」の今後の展開として、半日コースや1日コース、季節毎のコースなどを考えています。なにか良いアイデアがありましたらお書きください。
5. 今後のラリーマップは有料販売にして、お土産や食事に使えるクーポン券の様なものを付けたいと考えています。有料販売となったマップを利用しますか？また、利用したいと思わせる工夫があればお書きください。
6. その他、「かるたラリー」について何かありましたらお書きください。

調査実施

(1) 首都圏大学生体験調査プログラムの策定

- ・ 従来あった「下北かるた」を活用した観光プログラムを開発する。
- ・ 「下北かるた」で取り上げられたポイントに看板を設置し、その看板を巡る「かるたラリー」の可能性を探る。
- ・ 「下北かるた」の関係箇所を示した「下北かるたマップ」に従ってラリーを実施する。
- ・ 看板は合併前の8市町村に設置し、下北地域を一周できるようルートを設定する。
- ・ 首都圏の大学生を対象に実験的にかるたラリーを実施し、冬季観光に使えるかどうか、検討することとなった。

(2) 首都圏大学生体験調査の経緯（ニーズの把握）

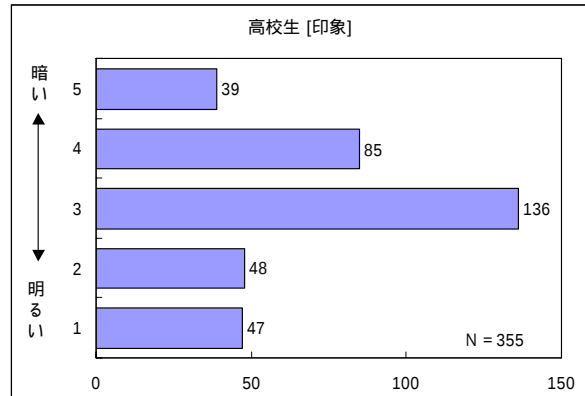
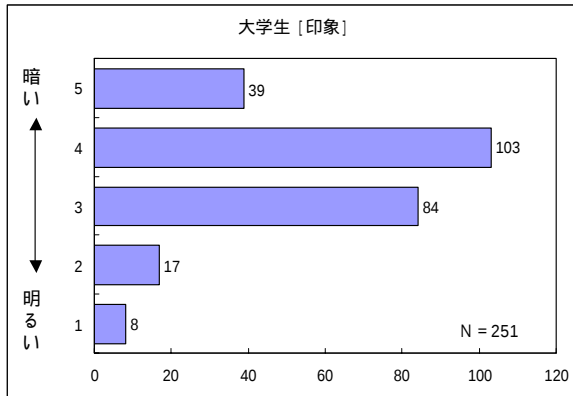
- ・ 下北地域は、観光資源が多数あるが、観光ポイント間の距離が離れていることが従来からの課題であった。
- ・ そのため、観光ポイント間の移動中の楽しみ方の一つとして、既存の「下北かるた」を活用した「かるたラリー」を提案した。
- ・ 下北地域に呼び込む若年層の実証例として、首都圏大学生の体験調査とした。
- ・ 首都圏大学生の目線から、かるたラリーの観光資源としての可能性を探ることとなった。
- ・ この調査により、「かるたラリー」の観光資源の可能性、大学生世代のニーズなどが明らかになる。

調査結果とりまとめ

(1) 事前アンケート調査の結果

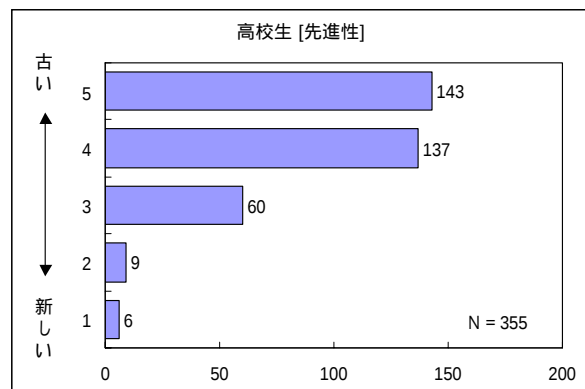
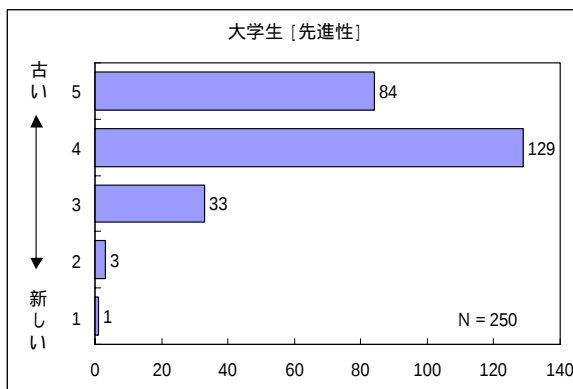
○ 下北半島のイメージについて

印象



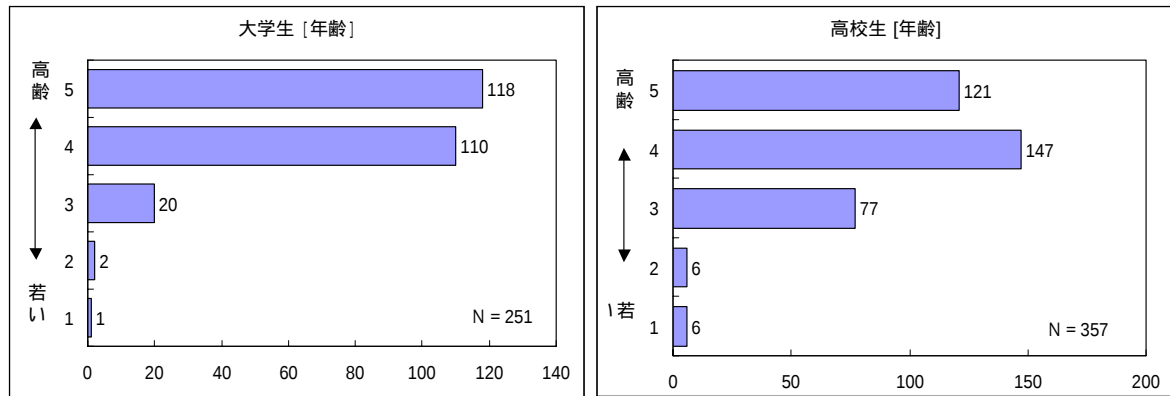
- ・ 大学生のほうが高校生と比較して「暗い」に重心があることが理解できる。
- ・ 高校生は、高校での教育の影響や、下北半島との比較対象が少ないなどの理由から、大学生と比べると、「明るい」印象を下北半島に抱いている。

先進性



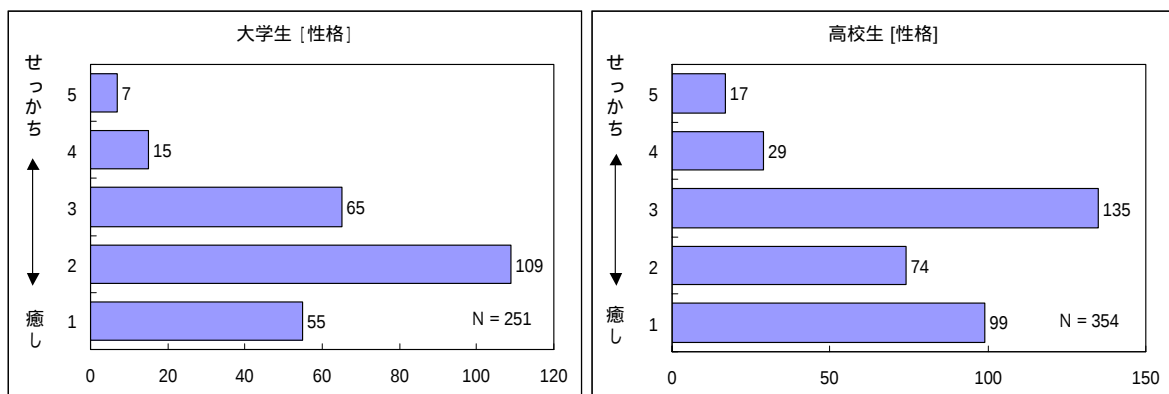
- ・ 大学生と高校生ともに、「古い」というイメージで共通している。
- ・ 両者とも「古い」に軸足がおかれている。しかし、大学生は「やや古く感じる (4)」に比重があるが、高校生は「最も古く感じる (5)」に重点がある。
- ・ 大学生より、高校生のほうが、下北半島を「古く」感じているようである。

年齢



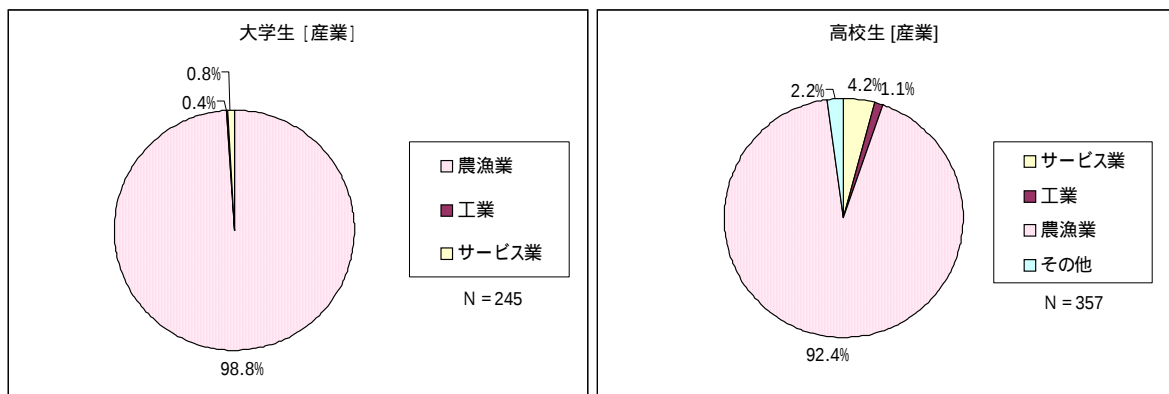
- ・ 下北半島の人にとえ、年齢のイメージを尋ねている。大学生も高校生も、ともに「高齢」を示している。
- ・ しかし、大学生が「かなり高齢（５）」を抱いているのに対し、高校生は「やや高齢（４）」が多くなっている。ここに若干の意識の差が見受けられる。

性格



- ・ 下北半島の人にとえ、性格のイメージについて尋ねている。
- ・ 大学生は「癒し系」に比重があるが、高校生は「癒し系」と「せっかちでも癒しでもない」という傾向に２分されている。

産業



- ・ 大学生と高校生が抱く、下北半島の産業のイメージについて尋ねている。

- ・ 大学生は242名（98.8%）が「農漁業」というイメージを抱いている。
- ・ 高校生は、大学生と同様に「農漁業」の印象を強く持っているが、それ以外にも「サービス業」や「工業」のイメージも持っている。
- ・ 大学生の「農漁業」に偏りすぎる、一方的なイメージの偏重が見られる。
- ・ ちなみに、第1章では、下北半島の産業別従事者数の割合について示しているが、必ずしも農漁業（第一次産業）が高いというわけではない。

○下北半島への要望

- ・ 大学生は「交通手段の改善」が多かった。また、下北半島のよさをアピールすることで、「東京になんてものを売る」という意見も多かった。
- ・ 首都圏と同じではなく、下北半島らしさを前面にだし、徹底的に差別化していくべきという回答が多かった。
- ・ また、「まぐろの一本釣り」や「イカ釣り」などを「体験したい」という声も多く聞かれた。
- ・ 高校生は、「大間まぐろ」や「陸奥湾のホタテ」といった産物の他、「人があたたかい」「やさしい」など下北に住んでいる人々についての言及が目立った。
- ・ また、「海」「山」「のどかさ」など「自然」が好きという回答が多かった。しかしながら、これらの自然は「どこにでもある」という否定的な回答も少なくなかった。

それぞれの回答結果は下記のとおりである（抜粋）。

<大学生>

- ・ マグロの一本釣りツアー
- ・ 海や山など自然が身近に感じられるような宿泊施設
- ・ 下北の有名なところをまわるツアーみたいなもの
- ・ 農漁業の体験サービス
- ・ 観光名所を分かりやすく案内
- ・ 歴史・風土について詳細にガイドしてほしい
- ・ 下北半島をありのまま感じられるような体験ツアー
- ・ マグロ食べ放題
- ・ 地域の特産品があると良いと思う。
- ・ 地域性を重視した観光
- ・ 下北半島がよくわかり楽しく遊べ、温泉に入れる旅行商品
- ・ 電車の数を増やす
- ・ 交通の良さ。
- ・ あっさり東京から行けないからこそ、地域の良さが残ると思うので、今の空気を維持しつつ、大間のマグロというものをアピールしていけばいいと思う。
- ・ 下北半島といえば大間のマグロが有名だから、マグロ食べ放題のサービスがあったらいいと思う。
- ・ ご当地の食べ物やお土産があればよい。

<高校生>

- ・ 町の人が優しい、田名部祭り
- ・ なんだかんだ言っても人の心は優しく暖かく感じる、それをどう伝えるかがポイント
- ・ 天候、自然、治安がいい、食べ物が美味しい、いか様レース
- ・ 時間の流れが都市周辺よりゆっくりな所、水が美味しい
- ・ 他の地域に比べて進んでいなくても、こんな感じの地域があってもいいと思う、一人一人が助け合える所なんて、他の地域を見たこともないから分からないが
- ・ 水がうまい、空気がきれい。
- ・ 自然がたくさんある。
- ・ 治安が悪くない。
- ・ のんびりしているところ。
- ・ 都会よりもずっと静かで過ごしやすい。
- ・ 山がある、自然がある、駐車場がただであまり混んでいない、土地が安い。
- ・ 形、住みやすい、場所が面白く説明しやすい。
- ・ 都会すぎないところ。
- ・ 田舎で、のどかで、落ち着くところ。

(2) 体験調査(かるたラリー)実施の結果

かるたラリーの体験者から得られた意見は、下記のとおりである(抜粋)。ここでは、かるたラリーのよかった点、改善点、観光資源としての可能性を示す。

質問1 今回の「かるたラリー」について、よかった点を具体的にお書きください

- ・ 下北の自然や寒さを直に体感出来た事です。ガイドブックなんかで見ると、とても自然に近くて広い土地だなと思いました。
- ・ 『下北かるた』にある場所に実際に行けたという点では良かったです。「かるたラリー」によって、下北地域を広範囲に見ることができました。
- ・ かるたラリーを行うことで下北かるたを知り下北半島についての知識が身につく。
- ・ ラリーマップの裏面でかるたの札が一覧できるのは下北かるたを理解する上で効果的だと感じた。半島内全てをフィールドとしたラリーは面白い。

かるたラリー自体は、体験者にとっても楽しめた企画のようである。おおむね好評であった。ラリーにより下北地域の名所がわかり、8カ所全て回った後には達成感も得られた戸の意見もあった。

質問2 今回の「かるたラリー」について、改善点を具体的にお書きください。

- ・あの環境(沿道にも特に何も無い、ポイント間の移動距離が長い)でトイレが閉鎖しているのはいただけない。
- ・食事もラリーの一貫にできるとなおよい。
- ・移動時間が長い。
- ・まだ数が少ないといのももちろんありますが、やはり一つ一つが離れすぎだと思います。
- ・また山道を結構通ったので、観光客には行きづらい場所もあるのではないかと感じました。
- ・名所に行ってもその看板しかない寂しいのでお土産屋さんなどがあると観光客としてはありがたい
- ・行った事が証明できたり、思い出に残るように、スタンプを押せるなどの工夫がほしい
- ・今回は車で回ることができたが、やはり交通には問題があると感じた。いざ自分たちで回るとしたら、困ると思う。周遊バスを運行するなどの改善が必要ではないだろうか。

改善点については、ハード面(トイレ、移動時間、距離、土産物屋)とソフト面(運営方法、ラリー方法)の両面での課題が挙がった。今回は冬期間に1日で回ったため、途中のトイレが閉鎖されていることも多く、その改善を求める意見も見られた。

また、冬期間の移動手段として、雪道になれていない観光客にとってレンタカーによる移動はかなりハードルが高くなることが指摘された。

質問3 「かるたラリー」の観光資源としての可能性について、具体的にお書きください。

- ・認知度を高めれば下北を効率良く回るための有効な手段となりうると思う。例えば観光ガイド(るるぶ等)誌上で紹介してもらうなど。
- ・目的地に行ってみて、ハイ終了だとさみしいので、その場所に精通している人の話を下北案内人として、少しの間でも聞ければ良いと思う。(5分くらい...)
- ・かるたラリーは観光資源といよりはまず地元の子供達に活用してもらった方が良いでしょうと思います。
- ・来た人にとっては観光資源になりますが、人を呼ぶための観光資源として活用するにはかなり大々的なPR活動が必要だと感じました。
- ・カルタラリーで全ヶ所回るのもいいと思いますが、テーマ毎にわけたラリーにしても良いと思います。(例えば、文豪や映画監督など著名人を訪ねるコースなど)
- ・「かるたラリー」の付加価値を明らかにすることができれば、観光資源としての可能性はあると思います。
- ・現時点では看板もすべて建っておらず、自分から下北を知りたいと思う人意外は興味を示すのか疑問である。しかし誰もが回りやすい環境をつくれれば気軽に寄ってくれる可能性があると思う。
- ・やはり、ラリーといえばスタンプがあると到達した証明になり、終わってからも楽しめるので欲しい。何ヶ所か制覇することで何か特典があるとラリーをしたいと思う。

かるたラリーの可能性としては、有効な資源となりうるという意見と、ラリー自体の意味合いを高め

た方がいいとか、回りやすい環境の整備が必要という意見が見られた。また、PRをどのようにしていくのが課題であるとの指摘が多かった。

3. 「冬季下北観光周遊プラン」提案のための実態調査

1) 調査対象及び手法の整理・提案

調査対象

本調査の対象は下記のように設定した。

- ・ 首都圏大学生（12名）
- ・ 首都圏大学生引率教員（2名）

調査手法

- ・ 滞在体験調査とする。
- ・ 首都圏大学生に、いくつかの「体験プログラム」を体験してもらう。
- ・ 「体験プログラム」の体験から、観光資源としての可能性を探る。

2) 滞在体験調査等の準備・実施及び調査結果とりまとめ

滞在体験調査等の準備

- ・ 既存の観光地めぐり以外の冬季の体験・交流型観光プログラムを創出。
- ・ 地域からの体験メニューの提案と学生の希望とのマッチング。
- ・ 学生が地域に入っていき、新たなメニューを見つけ出す。
- ・ 学生が冬季に下北地域へ来たくするようなメニューを、無いところから見つけ出す。
- ・ 回遊型ではなく滞在型（体験中心）観光を目指す。
- ・ 学生に、下北地域について下調べをしながら、体験・交流のメニューを考えてもらう。
- ・ 考えたメニューを県民局へ問い合わせる。県民局は問い合わせに応じて、地域とのマッチングをおこなう。
- ・ その上で体験プログラムを作成する。

滞在体験調査実施の内容（構成）

○ 下北地域冬季体験型観光資源調査（2月19日～20日）

日時	第1班	第2班	第3班
1日目	下北駅9:10発 < 下北交通 > 大間崎10:52着 ・ 本州最北端の地見学 エスコートクラブがお迎え ～ 漁協まで案内 ・ 漁協にて漁船見学、漁師から話を聞く 大間崎12:52発 < 下北交通 > 大間12:58着 ・ べこもち作り体験	下北駅通10:56発 < JRバス > 脇野沢12:09着 ・ クロソイ餌やり ・ ばおり餅、よもぎ餅作り体験 YH(磯山さん)の車で、YHへ移動	ホテル9:00頃出発 < タクシー > 大利伝承館9:15頃着 ・ そば打ち体験 ・ もちつき踊り体験 大利伝承館13:00頃出発 < タクシー > 原牧場13:15頃着 ・ 酪農体験 ・ バターづくり体験 原牧場15:30頃出発 < 徒歩約20分 >

	大間16:01発 < 下北交通 > 下風呂16:42着 ・公衆浴場「大湯」 ・温泉街散策 下風呂18:11発 < 下北交通 > 易国間18:42着 ○宿泊: わいどの家	○宿泊: 脇野沢ユースホステル ・アニマルトラック事前学習	斗南丘酪農16:16発 < 下北交通 > むつターミナル16:28着 むつターミナル16:50発 < 下北交通 > 下北駅前16:59着 ○宿泊: ホテル
2日目	わいどの木9:00 ~ 16:00 ・木工体験 易国間16:29発 < 下北交通 ¥1,450 > 下北駅前17:50着 ○ホテル着	脇野沢ユースホステル9:00 ・アニマルトラック 12:00 脇野沢12:55発 < JRバス > 自衛隊前13:54着 < 徒歩約15分 > 釜臥山スキー場 ・スキー体験 自衛隊前発 < JRバス > 下北駅通着 ○ホテル着	自治体体験 むつ合同庁舎10:00 ・一日局長体験(半日) (行政からの目線で観光振興体験、体験観光などの担当課への聞き取り調査) ~ 12:00まで < 川内漁協迎え > ・川内漁協にてナマコ加工体験 ・ホタテうろ落とし体験 < 川内漁協送り > ○ホテル着

滞在体験調査等の結果（とりまとめ）

下記のような視点の元、パワーポイント並びにレポートにまとめてもらう。

- 1．体験プログラムの観光資源としての可能性について
- 2．体験プログラムのよかった点
- 3．体験プログラムの問題点
- 4．体験プログラムの改善点
- 5．冬季下北観光周遊プランの提案

○各班の体験調査結果

< 1 班 >

●体験調査の魅力

- ・ エネルギーがなかったら
- ・ おいしいマグロ丼
- ・ 伝統を学ぶことができる

- ・ べこもちを作ったその場で食べることができる
- ・ 地元の人がフレンドリー
- ・ わいどの家の設備に感動
- ・ 自由な発想の木工体験
- 改善点
 - ・ 体験金額の問題
 - ・ 食事をする場所の確保
 - ・ 体験時間が短い
 - ・ 下風呂温泉共同浴場の設備
 - ・ 木工体験での詳しい説明がほしい
- 提案
 - ・ 使われていない施設の活用
 - ・ 土産物屋と連携した土産物開発
 - ・ 手作りしたべこもちにお土産としてシールを貼る = 記念となる
 - ・ 下風呂温泉共同浴場をもう少し観光客向けに
 - ・ 体験先での地元の方々とのふれあい
 - ・ 雪の演出

< 2 班 >

- 体験調査の魅力
 - ・ クロソイの餌やりでは漁船に乗ることができ、漁師の方との交流ができた
 - ・ かっちゃん達がやさしかった
 - ・ 郷土料理を食べることができた
 - ・ 地元の方々との会話ができることで旅行者の好奇心を刺激した
 - ・ アニマルトラックは非常に興味深かった
- 改善点
 - ・ 体験についての説明がほしい
 - ・ クロソイ料理を味わいたかった
 - ・ 観光メニューとして受け入れられる体制が整えられるか
 - ・ 大人数の対応ができるのか
 - ・ 体験行程の工夫が必要
 - ・ アニマルトラックガイドの確保
- 提案
 - ・ 観光客の受入体制の整備
 - ・ 観光商品として売り出すための前向きな姿勢が必要
 - ・ アニマルトラックを活かした首都圏へアピールが必要

< 3 班 >

- 体験調査の魅力
 - ・ 蕎麦打ちの魅力は味の良さと地元の方々との交流

- ・ もちつき踊りは楽しい体験であった
- ・ 酪農体験を通じ、酪農業の重要性を認識できた
- ・ 漁協による体験は「特別な体験をした」という充実感
- 改善点
 - ・ 蕎麦打ちは一定以上の団体客でないと通常は受け入れない点
 - ・ もちつき踊りは体験するより見るものと感じた
 - ・ 酪農体験を実施している農家が1軒のみ。受入体制はどうなっているのか
- 提案
 - ・ 「交流・郷土料理・新しいお土産」をキーワードに受入体制を検討してはどうか
 - ・ 企業秘密がともなうがナマコの加工体験は、貴重で魅力的な体験に転換できると感じた
 - ・ リアルなナマコキャラクターなどで、食用以外の魅力発掘ができるのではないか

○ 冬季下北観光周遊プランの提案

- ・ 視覚資料（パンフレット、写真、パネルを使ってガイド）の提供
- ・ 最低限の設備（清潔なトイレ、ドライヤー、暖房、安全）
- ・ 雪の活用
- ・ 交通フリーパス券の導入
- ・ 「脇野沢ならではの」の体験学習、交通機関の確立、スローライフの提案
- ・ 地域住民とのふれあいを通じた体験学習
- ・ 「学習」という特色を押し出す。そのために体験前のレクチャーを実施する
- ・ 不便さをアピールして特徴にする＝地元の日常を体験することで旅と栗生の高揚感を味わえる。
- ・ 1日乗車券の導入
- ・ かっちゃん達が案内人となる「周遊ワゴン」を導入
- ・ 不便さを含めた「脇野沢・下北地域」のスローライフを首都圏の人たち向けの商品として提案
- ・ 「温かい観光地」を目指す
- ・ 地理的条件から、「地吹雪ツアー」「津軽海峡荒波ツアー」「雪山探検」と「温泉」「海産 BBQ」などの組み合わせ
- ・ 「下北のイメージ」と「下北にあるいいもの」の組み合わせ
- ・ 下北名物「一球入魂カボチャ」「十割蕎麦」「願掛岩」から連想される「野球のイメージ」を使い、例えば「必勝祈願ツアー～北れ、挑戦者。本州のてっぺん」というのはいかがか
- 「下北名物」と「連想されるイメージ」の組み合わせ

【まとめと展望】

1．本調査から得られた知見

本報告で得られた知見は以下の通りである．

- ・ 若年層の下北半島のイメージは、あまり強いものではなく、「無色」といえる。
- ・ 首都圏の大学生にとって若干「暗い」「高齢」だが、「癒し」のイメージがあることが分かった。
- ・ 大学生の要望としては、普通の観光よりも「体験型観光」を志向していた。
- ・ 地元高校生は、「人の優しさ・温かさ」に注目していた。
- ・ かるたラリーは、観光資源になるという意見と、それだけでは難しいのではという意見に二分された。
- ・ ラリーを効率よく回るための方法やラリーをする動機付けをどうするかといった指摘、効果的に PR する方法が課題との意見が出された。
- ・ 滞在体験調査では、体験先での地元の人々との交流に感激しつつも、観光プログラムとしての受入体制が整えられるのか？といった疑問があげられた。
- ・ また、提案としては、既存の施設で観光客を受け入れるための少しの工夫が必要と意見や、観光資源を活かした新たなキーワードによる観光ツアーの誘致などの意見が寄せられた。

2．今後の展望

本調査は下北地域の「冬」を対象として実施した。観光のオフシーズンでの調査でも、観光資源となるものが多数発見された。また「冬」ならではの下北半島の魅力があることがわかった。しかしながら、そうした「冬の魅力」を地元が上手く活用しきれていないことも明らかになった。

今後の課題としては、下北半島の観光シーズンである「夏」や「秋」なども、首都圏の大学生の協力を得ながら、調査をする必要がある。そこで発見される下北半島の魅力が、「冬」の観光にフィードバックされて、オン・オフシーズンの PR 方法に反映されることが期待される。

また、「冬の魅力」を活用するため、大学生との連携と強め、地元の人々とのコラボレーションにより「冬の魅力」の具体化へつながることが期待される。それにより、オフシーズンでの入り込み観光客数の増加をはかり、下北半島の交流人口増加の一助となるよう、継続的に取り組んでいく必要があるといえる。

【とりまとめ(首都圏大学生)】

<1班レポート>

下北地域冬季体験型観光資源調査報告書

1班(大間町・風間浦村コース)

河野 康乃 菊池 恵美 田中 里絵

1、はじめに

今回私たちは、実際に下北地域の観光体験をすることで、これまで知らなかった下北を身をもって感じることができた。

下北地域には豊かな自然や鮮度抜群の海鮮、心温まる郷土料理など若者層を呼び寄せるに足る魅力が豊富にある。しかし、現状としてそれらを十分に生かし切れていないのはなぜなのだろうか。交通の不便さ・認知度の問題等、実際の下北を知らない人でも想像可能な理由はいくつかあるが、「本物」の下北を観光体験した立場だからこそ感じ得たその要因そして改善点を以下で述べることで、下北地域ならではの魅力をアピールしていく方法を考えたい。

2、観光体験の流れ

本調査において、実際に私たちが体験した1泊2日の行程はおおむね次の通りである。

1日目（2008年2月19日）

時間	場所	金額
9:10	下北駅発 ↓ 1時間42分	下北交通 ¥ 1,930
10:52	大間崎着 エスコートクラブによるお出迎え 本州最北端の地見学 お土産屋で買い物 展望台(シーサイドキャトル)見学 漁港見学	観光案内 ¥ 8,000 (1団体)
12:25	昼食(エスコートクラブお手製のマグロ丼) 漁協組合長さんのお話 エスコートクラブの手作りお土産拝見	
13:30	べこもち作り体験 べこもちマイスターのお話	べこもち ¥ 6,500
16:09	日和町発 ↓ 33分	下北交通 ¥ 1,030
16:42	下風呂着	
16:50	共同浴場「大湯」	入浴料 ¥ 300
18:11	下風呂発 ↓ 13分	下北交通 ¥ 500
18:24	易国間着 わいどの家宿泊	宿泊費 ¥ 5,000
一人当たり ¥ 15,260 × 3人 + ¥ 8,000(エスコートクラブ) = ¥ 53,780		

2 日目 (2008 年 2 月 20 日)

時間	場所	金額
9:00	わいどの木 木工体験	木工体験 ¥ 5,000
16:29	易国間発 ↓ 1時間21分	下北交通 ¥ 1,560
17:50	下北駅着	
一人当たり ¥ 6,560 × 3人 = ¥ 19,680		

3、考察

(1) 体験プランの考察

・おおまエスコートクラブによる観光案内

最初に私たちが訪れた大間町では、マグロ漁師の奥さん 4 人組で結成され、観光ガイドなどを活動内容としているおおまエスコートクラブの皆さんに本州最北端の地・大間崎にて大漁旗を振って出迎えて頂いた。これにはとても驚いたが、インパクトがあり海の町ならではの歓迎方法だと思った。移動する車内でも下北弁で大間や下北についての様々なお話をして下さった。方言は都市部の人々には新鮮なものとして映り、旅行をしているという実感をより味わうことができる。そのため、方言によるこのガイドは観光客がいわば「田舎っぼさ」に触れられる絶好の機会である。

続いて案内して頂いた西吹付山展望台（通称はげ山）の 360° のパノラマは素晴らしく、夏場なら景色の楽しみや過ごしやすさがあり、当季のような冬場には空気が澄んでいるため海の向こうの北海道を望むことができる。その山頂付近にある大間町畜産物加工センターは新しく使用しやすい建物に思えたが、あまり利用されていないということだった。そこで、例えば食事場所としてここをエスコートクラブの案内コースに含めるなどと活用していったらどうかと考える。というのも、大間崎付近では食堂など食事をする所をあまり見かけることができなかったという理由がある。営業しているお店もあるにはあったのだが、観光客には入りづらい雰囲気が多少なりともあった。食事をする所がないというのは観光地として致命的なことであると思うので、改善が強く求められる。

同様に土産屋も営業しているかどうかの判別が付きにくく、観光客とりわけ若い人々には入りづらい。冬の閑散期ゆえということもあったのかもしれないが、土産屋自体に人が入らなくてはマグロー筋ステッカーやエコバッグ、最北端証明書などせっかくの商品を生かし切れない。より明るく清潔感が感じられる店先の演出が望まれる。冬季であれば思わず店内に入りたくなるような温かい雰囲気を出すことが有効ではないか。また、漁協で拝見したエスコートクラブの方々の手作りによる土産を土産屋では見ることがなかった。漁協独自のものという意図や生産量の問題もあるのかもしれないが、エスコートクラブを一般客に認知してもらうには少数でも店頭に置き、ポスターなどで宣伝、周知する事も必要ではないだろうか。そして、土産屋では「最北端証明書」の発行はあったが、パンフレットなどがほとんどなかったのが残念だった。私たちが訪ねたときは観光案内所が閉鎖されていたが、そういった所にパンフレットやおすすめスポットなどを記載した視覚的資料を置くべきである。観光地として売り込む以上、そういった案内的なものはやはり欠かせない。

大間町は確かに「大間のマグロ」として有名な場所ではあるが、現実には旅行者が観光できるスポットは少ないと言わざるを得ない。その中で、黒いダイヤと呼ばれるマグロが水揚げされる港は一つの観光スポットとして足り得ると思うが、観光客のような素人が行ったところで右も左も分からず、それでは大間の奥深さが伝わらない。そこで今回のようなエスコートクラブによる漁船やその漁師さん、地元の

方々を紹介して頂きながらの漁港見学は観光資源として大いに期待できるだろう。

エスコートクラブの料金設定も大型バスなどの一団体ごとと考えれば格安かもしれないが、一般客にはどうしても割高になってしまう。内容・人員に差はないため致し方のないことなのかもしれないが、もっと少人数向けの料金設定などがあると望ましい。そうしなければ、大きなツアーなどの団体客はあっても、個人的な観光客・旅行者を大間町に呼び寄せることは難しいだろうし、何よりもこのエネルギーが活かしきれず触れあう機会を得られないことになってしまう。元気あふれるエスコートクラブの皆さんは、大間を訪れる人に必ず出会ってほしい方々なのである。

総括的に、大間町はエスコートクラブや漁港をもっと観光化していくこと、そしてその周知度を上げることが重要だと思われる。

・べこもち作り体験

次に私たちは、こすもすの家生活改善グループの方々のご指導により、べこもち作りを体験した。初めは、完成図の複雑な花模様にはべこもち作り初体験の私たちはしり込みしてしまったが、手取り足取りの丁寧な指導を受け、何とか見映えするべこもちを完成させられたと共に、一連の作業を通して古くから伝わる伝統に触れることができた。

今回の体験では、作り始める前と終了後にマイスターの方からべこもちについての詳しいお話があり、その在りようをよく理解することができてとても良かったが、実際にべこもちを作っていく過程では、指導者の方の手元をただ見よう見まねで必死についていくという感想を抱いてしまう面があった。作業全体を通して、時間は十分にあったにもかかわらずあまりゆとりを感じることができなく、その点では手順などを示すパンフレットのような視覚資料があれば体験者の理解をより深めることができると考える。また、そうした資料の存在によって、体験が終わった後にも体験者が作業を振り返ることも可能になるという利点も生まれるのではないだろうか。

オリジナルのべこもちを完成させた後は、自分の作品を持ち帰ることができ、体験の思い出として良い土産品となる。今回、そのべこもちは一つつつ丁寧にラップで包み、さらにプラスチック容器に入れて頂いたのだが、ラップなどに貼るロゴシールのようなものがあれば、べこもちをそのまま旅行のお土産として知人らに渡すこともできるため、さらに体験者たちの満足度を高められる可能性があるだろうと感じた。

また、今回の体験費用は一人 6,500 円であった。私たちのような年代の者によっては、この値段は気軽に手が出せるものではない。このため、人数にかかわらず講師代の一人当たりの費用負担が軽くなる大人数での場合は良いかもしれないが、少人数では安直に取り組むことがしにくい体験であると言える。一人ひとりが持ち帰り可能なべこもちの量も、作ったものすべてなのでかなり多く有り難いのだが、値段と量の加減が今後考慮されていくべきかもしれない。

べこもち自体はとても美味しく、大満足である。

・下風呂温泉

下北駅から最北端・大間町への移動、そして現地での様々な見学・体験と、大充実の一日を過ごした私たちは、夕刻、風間浦村に位置する下風呂温泉郷へと足を運んだ。室町時代から知られた湯治場であるそうで、下北地域では名高い温泉郷だ。私たちはその一角にある村営共同浴場・大湯にて疲れを癒すこととなった。

温泉街ということでもう少し賑やかな町並みを予想していたのだが、季節柄か人通りもなく、寂しい印象であった。また、利用した大湯の店先の入浴券券売機も見本券種が整然と並べられておらず、いささか気になった。施設内に入ると友好的な地元の方々と交流することができ、地域密着型の温泉郷であ

ることはよく感じられたが、その一方で観光客をも呼び込もうとするならば、券売機などの小さな事柄も意識していくことが今後求められていくのではないだろうか。こうした細やかな点は運営側の配慮によって良くも悪くも観光客に与える印象を左右できてしまうものである。

温泉は、硫黄泉が疲れた身体を癒してくれ、都市部ではなかなか味わうことのできない気持ち良さが経験でき、魅力的である。しかし、外部からの観光客にとってはドライヤーや備え付けのシャンプーなどがあれば有り難い。それが難しいのであれば、観光ガイドブックなどにそうした旨が明記されていれば良いと思う。

旅先へ行くことで精一杯の観光客にとって、温泉は極上の癒しである。そうであるからこそ、そうした者へのより一層の懇切さが、これからの下風呂温泉郷には必要とされるのではないかと感じている。

・わいどの家・わいどの木

宿泊先であるわいどの家では、ヒバの香りに包まれた温かな木造の家と気さくな社長さんご夫妻が歓迎して下さった。薪ストーブやロフト、全て木で作られた建物の雰囲気には班員一同感動し、若者含め幅広い年齢層に受けるだろうという印象であった。細々としたインテリアもご夫婦の趣味の良さを感じさせる。私たちは3人での宿泊だったが、もっと大人数でも泊まれる広さがあり、子ども連れの家族などにも人気がありそうだ。

わいどの木での木工体験では、自分の作りたいものにに応じて材料、設計の相談に乗ってくれる。本棚などの大型のものからスタンドやお箸といった小物まで、ありとあらゆるものを自由に作ることができ、社長さんはじめスタッフの方々も柔軟に対応して下さる。しかし語弊があるかもしれないが、自由すぎるという思いが浮かんてくることは否めないのかもしれない。普段木工体験などに親しみのない人にとっては、「作りたい物は？」と聞かれてもそう簡単には思いつかないはずだ。実際私たちもそうであり、与えられた材料で手順通りに作る、まるで工作の授業のようなものを想像していた。そのため、自分たちが目の前のヒバを使って何を作りたいのかと聞かれても、すぐには思い浮かばなかった。とは言え、ここがわいどの木の良さなのであろう。自分がこの材料で何を作りたいかを考えることはヒバの木一本一本に向き合うことであると感じる。だが、この良さに共感できる若者はどれほど存在するのだろうか。わいどの木での木工体験の楽しさを理解してもらうために、更なる働きかけが必要であると思う。

同時に感じたのは、一人ひとりの木工体験の経験に合わせた指導の必要性である。「自由な一人ひとりの発想を大切にしたい」といったコンセプトを重要視するとは言っても、最低限の指導・アドバイスはあって欲しい。電動のこぎりやドリルを使うため、安全性に対する不安もある。スローライフな雰囲気があって良いのだが、体験者によっては、受入体制の不備ととらえられてしまうかもしれない。そのため、訪れた人それぞれの需要をくみ取る必要があるだろう。そして、より多くの人にわいどの木の良さを知ってもらいたいものである。

今回は1泊2日の宿泊・木工体験であったが、社長さん曰わく宿泊してから木工体験と、木工体験したのちに宿泊するのとではまた楽しみ方が変わってくるという。木工体験を終えてからスタッフの方と囲む食事は格別であり、宿泊先の現地の方とゆっくり話ができる貴重な体験となるのであろう。宿泊が先の場合でも、仲間内で堪能できるような冬の天体観測、かまくら作りなどといった受入体制もあればよいのではないのかと思った。

はじめは、わいどの家のような素敵な宿泊施設が下北にあることに驚いた。わいどの木での木工体験も、時間を忘れるほど夢中になってしまった。もっとここで下北の思い出を作る人々が増え、また私たちの身近な人にもこの場所を知ってもらいたいと強く感じた、魅力満載の時間を過ごすことができた。

(2)交通その他の考察

本観光体験の移動手段は、現地での送迎を除いてすべて下北交通（バス）を利用した。2日間の移動にかかった交通費は一人当たり総額 5,020 円、総所要時間 3 時間 49 分である。2 時間に 1 本ほどというバスの便は、利用者数・需要から考えて仕方がないとしても、私たち観光客のような外部の者が利用するには不便だと感じずに入られない点が他にも散見された。

まずは、バス停留所である。停留所が道路の片側にしかなく、非常にわかりにくい。「こちらは〇〇方面行き」といった文句や、「道路の向かい側で待っていれば良い」などの表示が明確に欲しいものである。頻繁に利用する地元の方々にとっては当たり前のことであっても、観光客にとってはその全てが未知なのだ。

また、バス車内でも、前方に表示される電光掲示板の表示形式がわかりづらく、私たちも危うく一度乗り過ごしそうになった。次の停留所がどこであるかということが、車内放送だけではなく視覚でもはっきりとわかるようにして欲しいと感じた。さらに、車内において観光客向けのわかりやすい路線図や観光案内などの掲示があればより好ましいであろう。

観光客を呼び込もうとするならば、普段利用し慣れている地元の方がわかればそれで良い、といった姿勢ではなく、初めてその地に足を踏み入れた人でも安心して身を任せられるような空間作りが、観光客の足となる交通機関各所にも求められていくべきである。

4、提案

ここでは、1泊2日の観光体験全体を通して、下北の魅力を外部により発信していくために今後必要だと私たちが感じたことを挙げていきたい。

一般に、人が旅行や観光から帰ってきたとき、その思い出をより鮮明に浮き上がらせるものと言えば何か。それは、現地で取った写真や、パンフレットなどの視覚資料ではないだろうか。今回の体験では、視覚資料と呼べるものがとても少なかった。観光客の手に後々まで残るものとしても、体験中のガイドや説明にしても、である。現地で学ぶこと、知ることがすべて新しいことである観光客にとって、視覚資料の存在は大きいと私たちは考える。そのようなものがあれば、観光客のより深い理解や鮮明な思い出が残ることとなり、観光客・受け入れ側双方にとって有益であるだろう。大間町や風間浦村の方々はそういった観点も今後取り入れてみてはどうだろうか。

次に、現地の観光案内や手順説明についてであるが、上の視覚資料とも関連してくる部分でもあり、今回不足している面があると感じた。完全なマニュアル通りになってしまっただけでは生きたガイドや説明を聞くことができなくなってしまうため、それは避けたい。しかし、その場その場での行き当たりのものであっても、観光客の満足度に差が出てしまい、残念なことである。難しいところではあるのだが、両者のバランスを上手く取ったガイドや説明を、実施者側には模索して欲しい。誰がその地を訪れたにしろ、同質の説明を分け隔てなく受けられ、かつ、堅い定式化されたものでもなく、魅力を感じるガイド。難を極める高度な要求であることは百も承知であるが、未来の下北を考え、観光客の増加を求めるのならば、これはいずれ避けては通れない道となるであろう。

また、最も急務だと感じるのが、最低限の設備の整備である。特に言えるのが下風呂温泉郷についてだ。清潔なトイレやドライヤーなどについては、若者層を呼び込もうとする上では必要不可欠である。また、冬という季節に関して言えば、暖かな暖房設備も十分にされるべきであろう。温泉郷は地元の方々の憩いの場として普段利用されているのかもしれないが、観光客をはじめとする外部の者の受け入れも現時点ですで行っているわけであるから、脱衣所での安全面などの細かな配慮が求められると言える。

今回の体験で非常にお世話になった生活改善グループは、正に地元で頑張る女性のパワーを体現化したものであると言えよう。これからの下北にとって欠かすことのできない存在だということを短い体験の中でも強く感じさせられた。しかし、生活改善グループそれだけでは、おそらく今後乗り切ることのできない事態も出てくるのではないだろうか。例えば、べこもち作りで丁寧なご指導を下さったこすもすの家生活改善グループは、メンバーの方々がご年配ということで、パソコンなどによる資料作りといったことは今現在もなされてはいない。このため、今後、生活改善グループをサポートする存在や、そうした地域全体での取り組みが必要とされるだろう。

最後に、首都圏に暮らす者にとって、雪は非常に魅力的な北の資源である。私たちの今回の体験では、残念ながら雪を利用した幻想的な演出などを見ることはできなかった。確かに、大間町や風間浦村といった地方を実際に訪れてみて、想像していたよりもはるかに雪が少ない地域だということはよく理解できた。けれども、少ないながらも、雪でできることはたくさんある。大仰なものでなくても良いのだ。個人宅ごとでできるような、小さな演出でも全く構わない。首都圏に暮らす者にとって、それほどまでに雪は貴重で魅力的なものなのである。下北の方々にはぜひ、雪という自然資源を活用し、若者へのアピール材料として発信して欲しいと思う。

5、おわりに

首都圏に暮らす私たちにとってまったく未知の存在であった下北の地に初めて足を踏み入れてみて、外部の者だからこそ見えてきた下北の魅力がたくさんあった。その一方で、下北をもっと良くしていくための改善点も見受けられた。この先、下北地域がどう変化していくのかますます目が離せなくなりそうだ。

また、下北での成果発表会後に行われた意見交換会では、観光体験だけでは決して出会うことのできなかった方々と交流することができた。こんなにも下北を思い、下北のために何かをしている人・しようとしている人がいるのだ、ということを実感することとなった。下北の新たな魅力を発見するのは外部の者かもしれないが、それをより広く伝えるためには地元の方々の力が必要不可欠であると思う。その要件が、下北はすでに満たされていると言えるだろう。

短期間の体験ではあったが、その中で感じたままを素直に述べさせていただいた。体験に際しご協力下さった皆さんにはこの場を借りて感謝を申し上げたい。

私たちの体験報告が下北の未来の一助となれば嬉しく思う。

< 2 班レポート >
2008 年 3 月 6 日提出

Team under-North
佐藤 怜 奈
関 根 綾 子
田花康志郎
藤 山 良

首都圏の大学と連携した首都圏の若者との交流推進調査
下北地域冬季体験型観光資源調査（2008 年 2 月 19～20 日）
Team under-North（第 2 班）報告書

1. はじめに

2008年2月16日より23日まで、私たち「首都圏の学生」は地方再生モデルプロジェクトの一環として、下北半島（むつ市と下北郡の市町村）に「調査」へと向かった。本調査は下北半島と関係のない首都圏の学生という観点から、「冬」に首都圏の若者層を下北半島に呼び寄せるために必要なコンテンツを発掘し、特に下北半島の観光資源を自ら体験することで、その具体的な提案を行うことを目的とした。

8日間に及ぶ体験調査の中で第4～5日目にあたる2月19～20日は、下北地域冬季体験型観光資源調査として3つのグループに分かれて調査を行った。私たち Team under-North（第2班）は、むつ市脇野沢地区を担当し、様々な交流観光プランを行った。具体的な行程や費用等は以下の表に示した通りである。1泊2日という短い期間ではあったが、脇野沢地区の人や自然など将来的になりうるだろう観光資源を実際に体験することで、その魅力や改善点など様々なものを見ることができた。今回、私たちの感じたことが今後の脇野沢地区の更なる発展に少しでも役立つことができるなら幸いである。

2. 具体的な交流観光プランについて

ここでは、2日間で体験した主に4つの交流観光プランについて個々に述べていきたい。

○クロソイ餌やり

1日目、むつからバスで約1時間30分かけて脇野沢地区へと向かった。脇野沢へ到着後、現地の「食事処たいじま」で「やき干しラーメン」を食べ、脇野沢村漁業協働組合を訪ねた。私たちはこの漁協のご協力でクロソイの餌やり体験をした。脇野沢では昭和58年からその本格的な養殖の研究・調査を行っている。漁協の方に港まで車で送っていただき、ライフジャケットと長靴を借りて海に出る準備をした後、ひらめ丸という小さな漁船で養殖場まで移動した。船から足場へと移り、1つの区画で約200匹養殖されているクロソイに餌であるサバやカタクチイワシを撒いた。勢いよく餌を食べるクロソイの様子を観察することができた。2箇所の養殖場を回り、所要時間は30分程度であった。

クロソイの餌やり体験を通して、この体験が観光商品となりうるかを検討していきたい。まず、長所と体験後考えられた要望や疑問点を挙げる。

長所

- ・ 漁船に乗ることができる。
- ・ 養殖の仕事の一部を知ることができる。
- ・ 地元の漁師の方々と交流することができる。

要望

- ・ 餌やり体験に関して事前説明がなかった。
- ・ 上記と併せて、クロソイについての説明がなかった。
- ・ 餌やりだけではなく、実際にクロソイ料理を味わいたかった。
- ・ 漁師の方々に、この体験を観光商品として受け入れられる体制があるのか。

漁師の方々と交流する機会のない都会から来た若者にとって、クロソイの餌やり体験は楽しめるものであった。しかし、観光商品として継続的に提供していくためには商品に手を加える必要があるだろう。例えば、観光で訪れるならばメインの餌やりの前後に企画があるとより楽しめると思う。体験前に脇野沢で獲れるクロソイ

をはじめとした魚貝や養殖について漁協の方々より説明を受けられる講習の開催や、実際にクロソイ料理を食べるなどのオプションがついている方が1つの観光資源として深みやまとまりが出てくるのではないだろうか。

また、今回は4人の学生を相手に30分程度の餌やり体験をさせていただいたが、漁協の方々には観光客の相手をしている時間や余裕があるのかという疑問も生じた。もし上記に挙げたようなオプションを展開するならば、観光客を相手にした仕事が増えるために人手が掛かり、人と接するためのスキルも必要となる。一日に何人の観光客を受け入れるのか、どのような観光商品にするのかといった受け入れ態勢を考えるべきであると感じた。

○ばおり餅・よもぎ餅作り、ホタテ貝の開き方体験

クロソイ餌やり体験後、蛸田地区生活福祉センターで「ばおり餅・よもぎ餅作り、ホタテ貝の開き方体験」をした。ここでは脇野沢の「つつじ生活改善グループ」に所属する「かっちゃん（お母さんの意味）」のご協力によって体験が進められた。

ばおり餅とは、脇野沢で昔から作られていた餅で、山に行く時など日除けのために被った「ばおり」と形が似ていることからそのように呼ばれ、餃子のような形をしている。今ではほとんど作られることがなく、年に1度の産業まつりで婦人会の方々が出品するかどうかというめずらしいものだそう。その特徴としては、餅の皮にジャガイモの粉を使用すること、中に味噌を入れることである。前者はジャガイモからでんぷんを取っていた昔、残ったジャガイモの再利用方として、後者は小豆を使う程の贅沢ができなかったことから生まれたそう。ただし、現在と今回は味噌に黒砂糖を混ぜたものを使用している。

「かっちゃん」たちに作り方を教えていただきながら、郷土の味やお話をお聞きし、とても楽しい時間を過ごすことができた。最後には調理したものをご馳走していただき、非常に美味しくいただいた。所要時間は約3時間で、料金はクロソイ餌やりと合わせて18,000円（4人分）であった。

この体験を通じて若年層に向けた新たな観光資源という観点から以下に長所・要望を挙げる。

長所

- ・ 地域住民と直接関わることができる。
- ・ 直接関わりを持つことによって、実際の生活の様子などを知ることができる。
- ・ 自分たちで作った郷土料理をその場で温かいまま食べることができる。
- ・ 自分たちでホタテ貝を開き、刺身を食べることができる。
- ・ 何よりもかっちゃんたちが楽しかった。

要望

- ・ 大人数でも対応できるのか。
- ・ 場所の確保は可能なのか。
- ・ 機械ではなく自分たちの手で餅をつくことから始めたい。
- ・ 作業工程の組み立てができていない（ホタテ貝の開き作業に手間取ってしまったため、ばおり餅が冷めてしまったなど）。
- ・ ばおり餅の味の更なる改善。

出来立てのよもぎ餅やホタテの刺身、貝焼きはとても美味しかった。かっちゃんたちの優しさから脇野沢らしさを味わうことができたと感じている。その土地にまつわる話などを地域住民より直に聞くということはとても興味深く、その地域に住む地域住民からだからこそ知りえる事実がある。各地の地域らしさを楽しい会話の中で発見していくことが旅行者の好奇心を刺激することに繋がり、また、それこそが旅の醍醐味であると思う。それらを実現する要素が脇野沢のかっちゃんたちとの交流を通じて見出すことができたと感じている。

ただし、上記の要望にも示したように私たちの体験した交流が観光資源に発展していくためには多くの課題が残されていることも考えていかななくてはならない事項のひとつである。ある程度の人数が収容できる施設の確保などのハード面、より充実したプログラムやきめ細やかな対応、観光商品として売り出すことに対する前向きな姿勢などソフト面の整備が必要不可欠であると感じた。

○脇野沢ユースホステル・アニマルトラック

今回、私たちは脇野沢ユースホステルに宿泊した。そのペアレンツである磯山隆幸さんとりょう子さんに受け入れられた。写真家でもいらっしゃる隆幸さんは、北限に住むサルやニホンカモシカの写真を撮影し、また、その生態を研究している。立地条件を活かし、動物たちの足跡を観察することによって生態や食物連鎖の仕組みを想像する「アニマルトラック」をこのユースホステルでは行っている。第2日目である20日、私たちはそれを体験した。

それぞれの動物の足痕（ほ乳類は四肢で歩くので、両手両足4個一組の足痕）を観察してその名を知り、足跡（長く続く一連の足痕）を観察して生態系を想像することができる、それがアニマルトラックである。脇野沢で見られる動物はニホンザル、ニホンカモシカ、ノウサギ、キツネ、タヌキ、アナグマ、イタチ、テン、ニホンリスなどである。それらの足跡を観察することから、その歩き方や走り方、食べた物や放尿脱糞、単独生活と集団生活の違い、餌場である広葉樹林と敵から身を隠す針葉樹林の使い分けなどを想像し、冬の森を体験する。前日の夕食後、隆幸さんによる事前学習を終え、実際に私たちは古くから伝わるかんじきを履いて、翌朝9時より愛宕山公園と牛の首農村公園の森の中へと入った。所要時間は約3時間で、脇野沢ユースホステルでの宿泊代・食事代（夕・朝・昼）・暖房費・入浴料（脇野沢村保養センター）・アニマルトラック代の全てを含めて5,770円（1人）であった。

体験して考えられた長所、要望を以下に示す。

長所

- ・ 宿泊費が良心的であった。
- ・ ユースホステルの内装がおしゃれであった。
- ・ 前夜の事前学習があることによって、動物たちの生態を予習できる。
- ・ 運が良ければ、野生動物を間近な距離で観察できる。
- ・ 牛の首農村公園の頂上からの眺望が良かった。
- ・ 愛宕山から見ると動物たちの生活場所がよく分かる（人間界と自然界が共存しているということが分かる）
- ・ ユースホステルのペアレンツが温かかった。

要望

- ・ 洗面所でお湯が出ない（ユースホステル）

- ・ 布団・毛布が薄く、寒かった（ユースホステル）
- ・ ドライヤーが置かれていない（ユースホステル）
- ・ 地元の方々を対象としていて、観光客を呼ぶことができるような施設ではない（脇野沢村保養センター）
- ・ 大人数では体験不可能である（アニマルトラック）
- ・ ガイドとなる方は隆幸さんの他にいらっしゃるのか（アニマルトラック）

アニマルトラックは冬の下北半島の自然を身近に感じるができる手段である。野生動物を間近に見ることができ、動物たちの生態を歩きながら学ぶことができる。都会に住む人々は動物を図鑑などで知ることはできるが、実際の生活風景を見ることはできない。しかし、今回、自ら山に登り、足跡を追いかけて触れることで、広葉樹林の下で草を食べる草食動物、それを追いかける肉食動物、その危険を察知して針葉樹林に身を隠す動物たちなど、彼らが生活する場所に足を踏み入れることができた。このようなことは都会での生活では決して味わうことのできない体験である。脇野沢全体にいえることであるが、アニマルトラックという体験型観光というスタイルは特に都会育ちの子供たちにとって間近に動物たちや自然界の仕組みを理解することができるきっかけとなるのではないだろうか。行政のバックアップや旅行会社とのタイアップにより都心に住む方々にこれを浸透させていくことができたらと思った。

ただし、このアニマルトラックに関しては特に自然が相手となる。現段階でも脇野沢に住む動物たちは、人間に追われるようにして限られた空間で生活せざるを得なくなっている。脇野沢の場合、人間と動物が共存する、そのバランスがうまく取れていると想像できるが、これを観光資源として活用する場合は注意が必要となるのではないだろうか。観光開発することは容易であるが、貴重な動物ばかりが生息しているだけに慎重になってもらいたいと思う。

○釜臥山スキー場

アニマルトラック後、むつ市街地に戻り、釜臥山スキー場にてスキー体験をした。ここは下北最大のスキー場で、陸奥湾を臨む立地にある。脇野沢より JR バスで約 50 分（1,690 円）海上自衛隊前にて下車。そこから徒歩 20 分。レストハウス「トムの家」にてレンタルスキー一式 3,000 円（3 時間）リフト 4 時間券 1,500 円。

長所

- ・ 陸奥湾に向かった眺望が最高だった。
- ・ コースが長い。

要望

- ・ バス停から遠い。
- ・ ロッカー、更衣室がないなどセキュリティ設備がない。

バス停からの徒歩 20 分がひたすら上り坂であったことが、課題であると思う。路線バスがスキー場まで行くなり、一定間隔で送迎バスを出すなどの工夫をすべきではないだろうか。立地条件としては最高だと思ったが、大型スキー場ではないのでスキー客を多く取り込むことは難しいと感じた。今回、私たちが体験したツアーのように周辺の観光資源との抱き合わせが良いかもしれない。また、今は地元の人がメインであるので必要ないかもしれないが、今後、観光客を迎えるのであればロッカーや更衣室の

整備などトラブルがないようにセキュリティ設備をしっかりと充実させていった方が良いと思った。

以上が2日間で体験した4つの交流観光プランである。これらを踏まえて脇野沢地区の今後の観光分野でのあり方をまとめていきたいと思う。

3. まとめ

今回の交流観光プランでは自然や地元の方々と触れる体験が私たち班員の印象に強く残った。これは日常では体験できない出会いであったからだと思う。しかしそれだけではなく、私たちが思い描く一般的な「田舎」に、ばおり餅や北限のサルのような脇野沢独自のものが融合した体験であったからだと感じている。

漁師さんやかっちゃん、磯山さんというように、それぞれの分野で活躍し、専門的な知識を持った方々のご協力で今回の体験は成り立っている。脇野沢の水産業や地域独自の知恵、歴史、文化、自然、動物たちの生態、その地へ訪れなければ決して分かることのない豊富な知識を得たことにより私たちは新しい発見をしたと実感している。実際、アニマルトラックでは前夜の磯山さんによる事前学習会での知識があったため、よりアニマルトラックに興味を持って楽しむことができた。

正直なところ、脇野沢を訪れる前までそれぞれの体験内容に地味なイメージしか持つことができなかった。そのため、どれだけ楽しめるのかという不安があったことも事実である。しかし、体験を終わった今、それぞれに相応のお金を出す価値はあったと強く感じている。

そこで、今後の観光分野での発展のあり方について私たちなりの提案をさせていただこうと思う。

まず、私たちは、「地元の人とのふれあいを通じて遊びながら学べる」という点に着目し、小学生から大学生まで幅広い世代の学習の場として脇野沢を提供するという案を提案したい。私たちの脇野沢での体験メニューは、観光商品として売り出すには、大人数の観光客を受け入れられない、ある程度体力がいる、地味であるという印象は拭えないものであると考えた。しかし、それぞれの場所でその分野のエキスパートと交流することで、地味なイメージを払拭し、その体験に対しての興味や楽しさが生まれてくることは確かである。このような体験メニューは単なる観光にとどまらず、学習という要素も含まれているのではないだろうか。具体的に、小学校の自然教室を始め、大学のゼミ合宿など比較的少人数であれば受け入れることも可能であると思う。そうすることで、都市部の若年層を呼び込むことも期待できるのではないだろうか。

では、さらに今後、このような観光を模索していくならば、学習という特色をより前面に押し出していくために何をすれば良いのか。その例を以下に挙げてみる。

- ・ 脇野沢の水産業に関する事前学習会などを行う（クロソイ餌やり）
- ・ 今回、体験した3種類だけではなく、より充実したプログラムや作業工程の確立をすることが望ましい。また、地元住民が郷土料理やその地域に関する話などをする（ばおり餅・よもぎ餅作り、ホタテ貝の開き方体験）
- ・ 現在、案内人を務めている磯山隆幸さんを中心に案内人の充実を図る（アニマルトラック）

これらのような要素を取り入れることで学習面の強化ができ、観光客と受け入れ側の距離が縮まることが予想されるので観光客は脇野沢により深い関心を抱くのではないだろうか。

また、たとえ片道だけの計算であったとしても東京から脇野沢までの交通費を考えると学生には手が出にくいと思う。さらに、1時間に1本のバスという不便さでは学生に限らず、多くの観光客に敬遠されてしまう。そのことを踏まえて現地での成果発表会では、不便さを解消するために観光客向けの新たな交通機関の確立を提案させていただいた。しかし、その後の地元の方々とのディスカッションで下北の現在の交通事情に不便さを感じないという意見をいただいた。実際、私たちも地元の方が日常生活で使用する路線バスと一緒に乗り込み、耳慣れない下北弁を聞きながら見知らぬ土地に来たのだという旅独特の高揚感を感じたことも事実であった。現代社会の都心で生活する私たちは特に過剰なまでの便利な世界で生きている。そのように感じるとともに、のんびりとした路線バスの魅力に改めて気づかされたのである。

現実問題としても新たな交通機関の設置というのは難しいと思うので、私たちはむつ市内から脇野沢までの道のりは路線バスを活用する提案に変更したい。しかし、観光客向けに本数をすぐに増やすことは不可能であると思うので、まずは1日乗車券の発売などで観光客の交通費を抑えて観光客を増やすように仕向けるのはどうだろうか。利用客が増えれば、路線バスも本数を増やすことが可能だろう。このようにして、脇野沢までの道のりは路線バスというツールで「下北の風」を観光客自身に感じてもらえるようにする。

私たちは脇野沢に到着後も何度か移動をしたが、その移動は各体験でお世話になった方々に送迎していただいた。その車内での会話が地元の人と観光客の距離を縮めるのに有効な手段であると考えた。地元の人には些細な日常の出来事であったとしても、この地域を選択して観光しに来た人たちにとっては、ふとした時に聞ける、このような話は興味深く嬉しいことである。つまり、住民にとってはどんなに小さなことでも旅行者から見ればどれもが珍しく、楽しいことなのである。そこで、地区内の移動は公共交通機関ではなく、可能であれば地元の方が運転する車で移動したいと感じた。例えば、かっちゃたちが案内人として各スポットを回る周遊ワゴンなどはどうだろうか。かっちゃという明るく、親しみやすい方々を観光客の身近に置くことによって「脇野沢らしさ」を観光客により感じてもらえるだろう。

以上が私たちの考えた脇野沢地区の観光事業に関する提案である。これらの提案には現実的に不可能なことも含まれているかもしれない。そして、脇野沢に住む地域住民の方々の協力がなければ成立しないものも多々ある。そのようなことを踏まえ、また、地域住民を大切な観光資源のひとつと考えるならば、彼らとの十分な打ち合わせが必要になってくるだろう。自然や人々の暮らしから感じるができる「脇野沢らしさ」を壊さず活かせるような観光地化を是非とも勤めていただきたい。あまりに不便過ぎては観光客が脇野沢まで来てくれないだろうが、多少の不便さは残し、段階を踏みながら「観光地・脇野沢」を目指して欲しいと思う。

最後になりますが、各地で温かく迎えて下さった下北半島に住む地域の皆さま、本当にありがとうございました。

< 3班レポート >

首都圏の大学と連携した若者との交流創出事業 第 3班報告書

第3班 小澤寛樹

山下貴子

古関達大

荒井順也

はじめに

今回の調査は、関係のない首都圏の大学生という外部の観点から、冬に首都圏の若者層を下北半島に呼び寄せるために必要なコンテンツを発掘することが目的である。「よそ者、わか者、ばか者」の視点から、2008年2月19日、20日の2日間、観光資源の体験調査を実施した。下北での体験したことをもとに、冬場の下北半島へ来てみたいと思わせるものはどのようなものだろうか、下北半島の魅力は何だろうか、ということについて考えていく。

また、私たちは他の班にはない企画として、県民局の方から観光行政についてヒアリングさせていただく機会を得ることができた。ここで下北地域全体の観光資源について幅広く教えていただいた。このことを活かし、各体験が下北地域全体の観光資源としてどうあるべきか、また体験はしていないが、ヒアリングによって知り得た観光資源について感じた魅力や今後の可能性についても考えてみることにしたい。「体験」と「行政の視点」を知ることにより得られたものから、若者の視点で新しい魅力ある下北観光の発掘を目指す。

本報告書の構成は、1.体験調査報告、2.観光行政ヒアリングをもとにした下北地域全体の観光資源についての考察、3.新しい下北観光プランの発掘（まとめ）となっている。

1. 体験調査報告

第3班の4名が体験したことは、そば打ち体験、もちつき踊り体験、バター作り体験、酪農体験、ナマコ・ホタテ加工体験の5つである。これらの中には現時点では実際に観光プランとなっていない（観光客を受け入れていない）ものもある。そのため、現状の体制や設備に関する改善点を考えるという立場では、調査の報告として不適切であると思われる。そこで、私たちは各体験を以下の3つの観点で順に記述し考察する。その体験の概要と、現在の観光客の受け入れ状況はどのようなものかについて。各体験の観光資源としての魅力とはどのようなものかについて。感想には個人差があるため、主観的な表現になってしまう可能性があるが、私たちが感じた率直な感想をもとに述べたい。しかし、なるべく素直な感想を記したいと考えたため、この点は了承いただきたい。

各体験が観光プランとして成り立つのかどうか、どうすれば成り立つかという今後の可能性について。この3つの観点から考察したい。

3班タイムテーブル

1日目

10:00～13:00 そば打ち・もちつき踊り体験

14:00～16:00 バター作り・酪農体験

2日目

10:00～12:00 青森県むつ合同庁舎にてヒアリング（下北地域県民局地域農林水産部
むつ水産事務所・普及指導室、地域連携部地域支援室）

13:00～16:00 ナマコ・ホタテガイ加工体験

1-1. そば打ち体験

体験の概要と現状

そば打ちは、東通村の大利伝承館にて大利生活改善グループの方々の指導のもとで体験した。そば打ちの模範を見た後、グループの方々に指導を受けながら、一人一玉ずつそばを打ち、その場でゆで、グループの方々と会話し、交流しながら試食した。また、そば以外のかぼちゃ（かぼちゃコロケ）、ブルーベリーといった特産品も試食した。

現状では体験で使用した大利伝承館の使用料等の関係で、少人数の体験では費用が割高になる。一定人数の団体でないと体験を受け付けられないこともあるため、県外からの少人数の若者旅行者にとって、利用しやすい状況とは言えない。大学生が行うとしたら部活・サークルなどの団体として体験することが可能かもしれない。

魅力と感想

そば打ち体験で注目したい魅力は、二点ある。第一に、十割そばがおいしく、そばと郷土料理の試食ができること。また、そば粉自体に若者をひきつける可能性を感じる。第二に、そば打ちそのものとは別に、大利生活改善グループの方々とのそば打ちを通じた交流が魅力的であったことである。

まず、第一の点についてである。そば打ち自体はとても楽しい体験であり、自分が作ったものを食べることができるという喜びがある。友人との出来上がりの差を見比べて、誰のそばが一番おいしいかなどを話しながら食べることも楽しかった。ちなみに、一玉のそばを、最初から最後まで一人で打つという体験は、3班の4人全員が初めてであった（そば打ちの一部経験者は2人）。また、そばとともに郷土料理を食べることができたことは、とても魅力的であった。そば打ち自体は下北以外の地域でも体験できるものであり、はじめての体験だったとしても、わざわざ下北にそば打ちに行こうとは思わないかも知れない。しかし、私たち（若者旅行者）は、その土地ならではのものを安く食べたいと思っている。そのため、そば打ち以外の昼食費が500円²という安さでおいしい郷土料理と自分の手打ちそばが食べられるコースに、とても満足した。下北の十割そばの歴史は古いという話も聞いた。そばが下北の名産であるという認知度が高ければ、さらに「下北でのそば打ち」に感動したと思うし、体験したいというインセンティブにもつながるであろう。

次に、第二の点についてである。私たちはそば打ちをご指導いただきながら、大利生活改善グループの方々といろいろなお話をすることができた。この交流の意義に着目したい。そば打ちを通じた交流は、そば打ち体験をより魅力的にするコンテンツの1つであると考えているのだ。そばを打ったりゆでたりしながらのお話しは、下北地域のことを知ることができる有益な時間であると同時に、地元の方々とのふれあいそのものに、喜びを感じた。

観光プランとして

以上を踏まえ、そば打ち体験が若者旅行者に対して持つ可能性を考察していく。大利生活改善グループの活動では、麺以外の製品として、そば粉ケーキやクレープを製作しておられた。これらのそば粉を使った他の製品も食べてみたかった。そば粉のクレープは都内でも若い女性に人気があり、魅力あるメニューとなりうるであろう。ケーキなども、そば打ちをした帰りにお土産としてあったら買いたいと思う。また、ブルーベリー・かぼちゃ・布のりのそばなど下北地域にしかない独自のそばを生み出せるのではないだろうか。しかし、新しいものも注目を集めるが、やはり郷土料理の存在は欠かせない。そこで、「交流・郷土料理・新しいお土産」という3点をキーワードに、どのような受け入れ態勢が適切か、考えてみてはどうだろうか。もちろん、多少費用が割高でも、少人

² そば打ち体験料としては、4人で2万5千円かかっている。（内約：そば打ち体験料8千円（1人2千円×4人分）、材料費1万円、施設利用料5千円、昼食費2千円（1人500円×4人分））普段の観光体験ならば、参加人数により負担額が異なるため、ここでは考慮しないことにした。ただし、4人でこの値段では高いという印象はあった。

数だからこそできるよさもあると思う。今後も不特定の団体客のみの受け入れを中心に行うとしても、体験メニューを少し変えることで、より印象深い体験になるだろう。グループの皆さんはとても優しく親切に指導してくださり、楽しく体験することができた。

1-2. もちつき踊り体験

体験の概要と現状

もちつき踊り³は、そば打ち体験のあと大和町生活改善グループの方々の指導のもとで体験した。そば打ち体験の後、グループの方の補助によりもちつき踊りの衣装に着替えた。もちつき踊りの実演を見学した後、実際に踊ってみた。踊りはグループの方々に指導していただいたが、一度で踊れるようになるわけではなく、なんとなく曲に合わせて動くのが精一杯であった。

また、この体験は一般の観光客が体験できるものではなく、観光客が体験したのは、今回が初めてだったそうである。

魅力と感想

女性にとってはこの可愛い衣装を着ることは楽しい体験であったといえる。しかし、男性にとっては女装ということもあり、少々気が引ける思いであったのも事実である。また、踊りに関しては女性だけが体験するにしても、これは体験するよりも見るものであると感じた。

観光プランとして

踊ることに抵抗はあるが、衣装自体はとても可愛らしいものであり、女性は着てみたいと思うであろう。例えば、お土産店などでレンタルで着て写真撮影などができるとしたら、よい思い出になるので着てみたいという人も出てくると思う。また、もちつき踊りが何のためのどのような踊りなのかということが分からなかったので簡単な説明も必要である。能舞と合わせて紹介することで、下北の文化の伝統が印象的に心に残るであろう。また、ここでもそば打ちと同じように、衣装を着せてもらいながらの団欒は、楽しいものであり、そば打ち体験同様の交流の意義がここにもある。

1-3. バター作り体験

体験の概要と現状

バター作りは、ミルク工房ボン・サーブにて体験した。経営者の原さんから、牛乳の殺菌方法、成分について説明を聞いた。説明をもとに、市販の牛乳と生クリームを混ぜたものを 500ml ペットボトルに移し、10 分程度振るとバターができた。バター、脱脂乳の試食をした。観光客の受け入れの現状としては、学校、職場、友人など 10 人以上のグループで、希望すると「酪農体験教室」を実施している。しかし、本業の傍らで教育活動の一環という位置づけで行っているものであり、少人数観光客が入れ替わり立ち代り体験できるというものではない。また、訪れる人はやはり観光客の多い夏場が多いようだ。

魅力と感想

バターづくりというと、乳搾りをしてそのミルクを工場でバターにするというイメージがあったため、実際体験してみて物足りないとも感じた。しかし、ペットボトルでできるこの体験は、牛乳に対する知識を深めるよい体験学習である。

観光プランとして

上述のように、現状を踏まえると観光客を沢山呼び込めるような体制のプランにはならない。しかし、教育効果は高いと思われる。若者向けというより、家族・子ども向けに食育活動を行っているということを宣伝する必要があると思う。

³ もちつき踊りとは、東通村に伝わる小正月の行事として行われる祝儀踊りである。赤襦袢に浅黄色のたすきをかけ、黒い帯、赤い腰巻姿の 4 人の踊り手が、円陣をつくり、手に小さな杵を持ち、真中に置いた臼の周りを囃子に合わせて踊りながら回るものである。青森県の無形民俗文化財に指定されている。

1-4. 酪農体験

体験の概要と現状

バター作りのあと、まず、原さんに開拓当初の斗南丘の歴史をお聞きした。次に、長靴に履き替え、ヤギの散歩、牛舎を見学、牛のエサやり体験をした。最後に、搾りたての牛乳をいただいた。この体験もバター作りと同様に、予約制で一時的に観光客を受け入れている状況である。

魅力と感想

斗南丘の酪農は、戦後中国から引き揚げてきた人によるものではなく、昭和 17 年ごろから内地の人が開拓をはじめたものということだった。そのため、補助金はなく開拓は旧制田名部中学校の生徒にも手伝ってもらったのだという。牧草を育て酪農が軌道に乗るまでに並々ならぬ苦労したという、昔の写真を取り返りながらの原さんの話はとても重みがあった。さらに、今日の飼料の高騰により経営が圧迫されているということを聞くと、私たちが受けている恩恵について考える必要があると思った。

牛のエサやりに関しては、牛と触れあうことも刺激的であったし、普段エサやり体験に来る地元小学生の反応に関する話は印象的であり、酪農教育の重要性を感じた。搾りたての牛乳は、パックで市販されている牛乳のような「いわゆる牛乳臭さ」がなかった。これは、酪農をしている方とところでしか味わうことができないものである。

観光プランとして

上述のように、この体験は本業の傍らで行っているもので、観光プランとしての方向性は、原さんに負う所が大きい。また、斗南丘で酪農を行っているのは現在 12 戸で、そのうち体験を受け入れているのは原さんのみであるようだ。体験を受け入れるのに、本業との兼ね合いがあること、観光客との話ができてはならないことといった課題があることをお聞きした。そのため、現状のまま観光プランとして拡大するには、原さんの負担が大きいと思われる。

1-5. ナマコ・ホタテガイ加工体験

体験の概要と現状

ナマコ・ホタテガイ加工は、川内町漁業協同組合⁴にて体験した。川内町漁協の取り組みを聞いた後、カップ等の着用など濡れないように準備をした。第一に、ナマコの乾燥や大きさの選別といった加工工程を見学し、加工の一部を体験した。第二に、ホタテガイについたフジツボをとる作業を体験した。このような加工体験は、特別な機会がないとできない体験である。

体験の後、新鮮なナマコ・ホタテガイ・ウニを試食させていただいた。また、ホタテガイは炭火焼でも味わった。ホタテガイは通年食べることができるが、冬が旬である。生のナマコは冬季限定である。冬にしか食べられない味覚が存在し、通常の観光シーズンである夏の方が必ずしも良いとは限らないといえる。

下北地域では、川内町漁協の商品はほとんど流通していない。地元のホテルでも使われていないという。また今回体験させていただいたものは、特別に考えていただいたプランで、現状としては一般観光客が体験できるものではない。

魅力と感想

ここで着目したいのは、特別な体験をしたという実感である。ホタテガイの加工においては、市場で流通しているホタテガイを想起すると、なたを使いフジツボをとる作業があることなど想像できなかった。ホタテガイの開き方（開くことを「ほやく」という）も指導いただき、その場でみなさんと食べたホタテはとても美味であった。

⁴ 川内町漁業協同組合：主にナマコ、ホタテガイ、アカガイを出荷している。平成 16 年度（第 43 回）農林水産祭にて、ナマコの資源管理の取り組みが認められ、水産業者の最高の栄誉となる「天皇賞」受賞した。

また、印象が強烈であったのはナマコの加工体験である。生のナマコを初めて見て、大変驚いた。フォームが少しグロテスクでもあり、ナマコをつかむことに相当な抵抗があった人もいた。そのため、失礼な言い方になってしまうのだが、「気持ち悪くてもう二度と触りたくない」という感想もあった。しかし、東京に帰ってきてからこの体験のインパクトが相当大きいものであったということに気づいたのである。ナマコの加工体験は、帰ってから人に話したくなるような話題性があり、話したときの注目度も高かった。生のナマコを見たことがある人も少なく、今回体験した3班のメンバーの中でも、4人中3人が、ナマコを見るのも食べるのも初めてであった。まして、触ったり、加工をするという体験は非常に貴重なものである。そのため、ある種「気持ち悪い」この体験は、貴重で魅力的なものに転換できると思うのである。

観光プランとして

ナマコの加工体験は企業秘密の工程であるため、観光客を受け入れるには限界がある。しかし、ナマコのインパクトは相当強烈なものであり、加工を体験できなくとも、もっと「川内のナマコ」を観光資源として使用することはできないのだろうか。「川内のナマコ」は「大間のマグロ」に匹敵する存在感があると思う。リアルなナマコのキャラクター化を推進するなどして、ナマコの食用以外の魅力を発掘できるのではないだろうか。

また、私たちはお土産として乾燥ナマコをケースに入れたものをいただいた。ナマコを見たことがない者にとって、実物をいただけたのは貴重である。しかも、このお土産は食べてしまうことも可能である。ナマコを見る機会、食べる機会の創出という点からも、「ケース入り乾燥ナマコ」のお土産化は検討する価値があるのではないだろうか。

2. 観光行政ヒアリングについて

今回、私たちが行政の視点からも観光を考えてみたいと考えた理由は、観光はどのように成り立っているのか、どうして観光活性が必要なのかということに疑問をもったからである。今回下北に来たのも、単純に行ってみたいという気持ちもあったが、観光政策に興味があったということも大きい。さらに、下北地域県民局の方に、農業・漁業・地域活性の3つ視点からお話を伺った。これにより体験したもの以外の、下北地域全体の観光資源について知ることができた。同時に、観光とは、行政だけで作るものでもなく、一般の住民だけで作るものでもない、という視点を得た。行政と住民がともに創りだすものであると感じた。地域に良い観光資源が眠っているのを見つけることや、PR すること、実際に産物を生み出すこと、観光客をもてなすことなど、観光にはそれぞれに様々な立場や要素が存在する。それぞれの要素が良いところを磨きあって、1つの魅力ある観光資源が成り立つのかもしれない。ヒアリングは体験だけでは考えることができなかった貴重な経験となった。

また、下北地域全体の観光資源について紹介していただいたことで、「下北にはおいしい産物(資源)がたくさんあるのだな」という好印象を受けた。以下では、体験はしていないが、ヒアリングの中で出てきた、魅力的であると感じた観光資源について考えてゆく。

かぼちゃの1株1果どり栽培の取り組み

現状

下北地域では1株1果どり栽培⁵で、かぼちゃの生産に取り組み、かぼちゃのブランド化を目指している。このかぼちゃは、糖度が高く、ホクホクした食感があることから、市場サイド、消費者の

⁵ 「一球入魂」の名前は、一株に実をひとつだけ成らせて大切に育てる独特の栽培方法に由来。一般的なカボチャ栽培では、少なくとも3個、場合によっては5~6個も成らせるものの、この栽培ではひとつだけである。この栽培は、決して目新しい方法ではないが、手間がかかるため、取り組んでいるところは少ない。「量」を確保する栽培でなければ採算が取れないという厳しい現実があるからである。

評判が高い。しかし、きめ細やかな栽培管理を必要としているため、1戸あたりの栽培面積は約20aに限られ生産者もまだ少ない。

魅力と考察

上記のように現在の生産者はまだ少なく、下北地域の代表としては途上であるといえる。一次産品であるため急に生産量を増やすことは難しい。しかも地元で流通していないため、地元での認知度も低い。しかし、そば打ちのときに食べたかぼちゃコロッケがとてもおいしく「一球入魂かぼちゃ」がとても印象に残ったことは確かである。ネーミングにもユーモアがある。

観光農園「ブルーベリー農園しもかわ」の取り組み

現状

東通村は、夏季冷涼で病害虫の発生が少ないことから、ブルーベリーを無農薬で栽培している。下北地域全体で80a栽培、昭和55年ごろから栽培を始める。生産されたブルーベリーは、(社)東通村産業振興公社へ出荷し、公社では「ブルーベリージャム」、「ブルーベリージュース」などに加工して販売している。

魅力と考察

ここでは一戸のみの取り組みの概要となっているが、ブルーベリーを無農薬で栽培している農家は数件あり、夏には摘みとりなども体験できる。値段は1kgあたり800~1000円程度である。これは若者が気軽に体験できる値段でもあり、ブルーベリー摘みはとても魅力的だと感じた。夏にぜひ摘みに来たい。

海軍コロッケ

現状

海軍コロッケとは大湊が発祥とされている。横須賀の海軍カレー、呉・舞鶴の海軍肉じゃがに続く海軍由来の料理である。しかしこのコロッケが手に入るのは年に一度催される食の祭典などの限定であり、口にする機会が少ないというのが現状だ。

魅力と考察

めったに食べられないコロッケということで、ぜひ食べてみたいというのが最初の印象だった。調理法が難しい等の課題はあるが、下北地域に来たとしても手に入らないことは残念でもったいないことであると感じた。「下北の海軍コロッケ」が実際に商品化されたら、定着する可能性はあると思う。

下北沢と下北半島のコラボレーションによる海軍コロッケの販売が検討されていたので、私たちは下北沢がどんなところなのか、下北半島物産の販売ルートとなり得るのか、という観点から、実際に下北沢に行ってみた(下北沢に行ったことがない班員が2人いた)。海軍コロッケが下北沢で手に入るとすれば、気軽に食べ歩けるコロッケは下北沢の街にあっていいのではないかと感じた。

また、話は少しそれるが、下北Tシャツを製作・販売者している東洋百貨店内カミカゼスタイルというお店の方に話を聞いてみた。下北Tシャツは、ただの下北沢だと思って買っていく若者もあり、こういった若者は、Tシャツ作成者の思う壺であるそう。しかし、最近では下北半島関係者が買っていくことが多いらしい。下北半島でこのTシャツを着てはご当地Tシャツになってしまうので、もしも下北半島で売り出すならば、もっとデザイン性のあるものがないのではないかと考えていた。このTシャツと同様に、海軍コロッケと下北半島と下北沢を関連付けることは可能であると感じた。

さらに、JR飯田橋駅西口から徒歩3分のところにある、青森県の物産と観光のお店「あおもり北彩館(東京店)」で「下北の海軍コロッケ」を販売することを検討してはどうだろうか。立地や青森県の下北ということを考えると、下北沢より妥当ではないかと感じた。

他にも多くの観光資源を紹介いただいた。これらの魅力ある資源があること、また体験とヒアリング、下北発表会後のディスカッションを踏まえた考察を、3.まとめ、にて行なう。

3. まとめ

全ての体験を通して冬の下北観光について考察したい。私たちが注目するのは、(1)交流のある体験プラン、(2)探究心を満たす体験プラン、の2つである。

まず、(1)交流のある体験プランについては、そば打ち体験を例に取り、詳しく見てゆきたい。そば打ち体験の記述で、私たちは交流の意義に注目している。私たちがそば打ち体験全体を通して楽しいと感じたものは、そば打ち自体というよりも、初めて訪れた地域の方との交流であったのではないだろうか。今回の企画は、「調査に行く」という目的があったため、私たちは一般の観光客の視点とは少し異なる視点で体験していたかもしれないのだが、さまざまなお話を通して、下北の生活がどのようなものなのか、ブルーベリーはどのように育てているのかなどといった、そば以外の生産物について、些細な話ではあるが沢山興味深いお話を聞くことができた。その情報自体というよりも、楽しい雰囲気や暖かさを感じ、それが楽しかったのだと思う。単なる観光プランにはない良さであったと思う。多くの観光客を受け入れる体制を整えることを目指すのではなく、少人数の体制だからこそ現れる魅力かも知れない。もちろん観光客全員が地域の方との交流を求めているわけではなく、「なるべく人とかわりたくない」という意見も多分にあるであろう。しかし、この交流を貴重で特別なことだと、魅力を感じる学生がいることも確かであるということはここに明示したい。

また、これはそば打ち体験のみに当てはまることではないのである。バター作りや酪農体験でお世話になった原さんは、酪農のみならず日本農業に関し高い問題意識を持っておられ、これからの農業の話にとっても心打たれた。また、川内漁協の皆さんとの交流も大変印象深いものがあつた。漁協に行く機会もなかなかないので、ホタテガイが水揚げされる様子や、働く様子を見せていただいたことも良かったし、ホタテガイを炭で焼きながら、そのまわりを囲んで話をして、下北の方言などについて伺うこともできたことがとても楽しかった。

交流するために旅行に来るという人はいないかもしれない。しかし、私たちが今回の体験で共通して印象に残ったのは、地元の方々との「会話・交流」であり、それがこの体験をより特別なものに感じさせたと思う。これを観光プランの良さに、反映できはしないだろうか。

次に、(2)探究心を満たす体験プランについてである。私たちは、今回の体験プランに対し、これまで述べてきたような様々な魅力を感じた。しかし、実際に自分でお金を払って下北まで体験しに来たいと思えるのかという課題が残る。この調査の下北発表会後の地元の方々とのディスカッションにおいても、「実際に若者は下北に来たいと思うのか」、「旅行に関する費用は、いくらまでなら出そうと思えるのか」等の疑問を抱いている方が多かった。ここから感じたことは、下北に若者を呼び込むためには、何か強い「目的」提示が必要ではないかということである。ここで言う「目的」とは、例えば今回の私たちの調査のように、課題が提示されている目的ではなく、各人の自主的な興味関心にもとづく探究的な「目的」である。そのためには、下北に行く意義や魅力、すなわち「目的」を見つけられなければ、首都圏からの距離がある下北へ足を運ばないだろう。この「目的」が若者の求めるもの(若者の探究心)と合致していれば、魅力ある下北観光が成り立つのではないかと考え、「探究心を満たす体験プラン」というキーワードを挙げた。

下北には様々な素晴らしい産物と、本州最北端というネームバリュー、特に冬となれば寒い、厳しいなどのイメージも湧きやすい場所であると思う。ここから、どのようなプランが考えられるであろうか。

まず、少々唐突で現実的ではないかも知れないのだが、「最北端」、「寒さが厳しい」というイメージより、「地吹雪ツアー、津軽海峡荒波ツアー、雪山探検」といった、最北端という地理的条件を生

かした、刺激的な響きのものは、見知らぬ土地への探究心がくすぐられるという意見が出た。実際には雪は少なく、このような体験はできないという意見をディスカッションでもいただいたが、関東に住み雪に触れる機会が少ない私たちにとって、雪はあるだけで魅力的である。また、これらに温泉や地元の海産物を自分で焼いて食べることができる(海産 BBQ)等のオプションがついていたら、若者向けの楽しいプランとなるのではないか。

次に、さまざまな産物を見て気になったのは、「一球入魂かぼちゃ」のネーミングである。一球入魂とは高校球児を連想させる単語である。ここに「十割そば」と「願掛岩」も合わせ、野球のイメージを固め、「必勝祈願ツアー」と題するのはどうだろうか。遊んでいるような企画であるかもしれないが、このように産物を組み合わせて面白く生かすことで、必ずしも若者に合うものになるとは限らないが、お互いの意外な魅力が結びつき、話題性のあるプランとなりうる可能性もある。

また、このような面白おかしいものとは異なり、就業やインターンシップなどの「目的」の提示も、若者を呼び込む手段となるであろう。これはディスカッションにおいても議論となった問題だ。この場合の「探究心」は、働くことや、地元の方との交流にあるだろう。下北には一つ一つは小規模かも知れないが、様々な良い産物が豊富にあるという印象を受けた。下北で就農、就業体験、ワークショップなどを積極的に実施すれば、さまざまなバラエティに富む体験プランが提示できるのではないだろうか。しかも、このような体験希望者にとって、交通の便が少々悪いことや、施設の不便さなどはほとんど気にすることはないと思う。「田舎に行ってみたい」、「遠くへ行ってみたい」と最初から「下北のような」場所を求めてくる若者は、探せば必ず集まるのではないかと思う。

このように、求めるものの違いは個人によって異なるが、下北の魅力をうまく抽出できれば、面白いプランがたくさんできるのではないかと感じた。観光プランを考えるときに問題点がないわけではない。交通費の問題、学生向けの格安パックが作れるかどうかといった費用面での問題、駅前が寂しい、飲食店が少ないといった不満の意見などの、ハード面からソフト面まで様々な問題は挙げられる。しかし、どんなに価格が安くても、便利な施設が充実しても、やはり「来たい」と思う何かがないければ来ない。私たちは、沢山の下北の方々と交流できたことで、下北での旅を特別に感じることができた。「来たい」と思ってしまったら、多少の交通の問題など関係ないとも考えられる。また、あえて冬に行くということでとても話題になり、かえって貴重な体験ができたことを嬉しく思っている。今回の体験は確かに特殊なものであるのかもしれない。しかし、このような「特殊」に食いつく若者がまだまだいるのだとすると、冬の下北に何か仕掛けることで、新たな若者ターゲットが浮遊してくるかもしれない。

おわりに

今回は冬の下北観光ということであったが、夏と比較することで見えてくる冬の魅力もあるだろう。ぜひ夏の下北にも来て、冬には見ることでできなかった下北を体験してみたいと思う。

最後になりましたが、今回の調査体験でお世話になった下北地域のみなさま、ご協力いただき誠にありがとうございました。今後の観光政策で地域が盛り上がり、下北がより活性化してゆくことを強く願っています。

< 各班が作成した下北地域のポスター・チラシ >

1 班

来さまい、下北！

豊富な自然の海と山！！

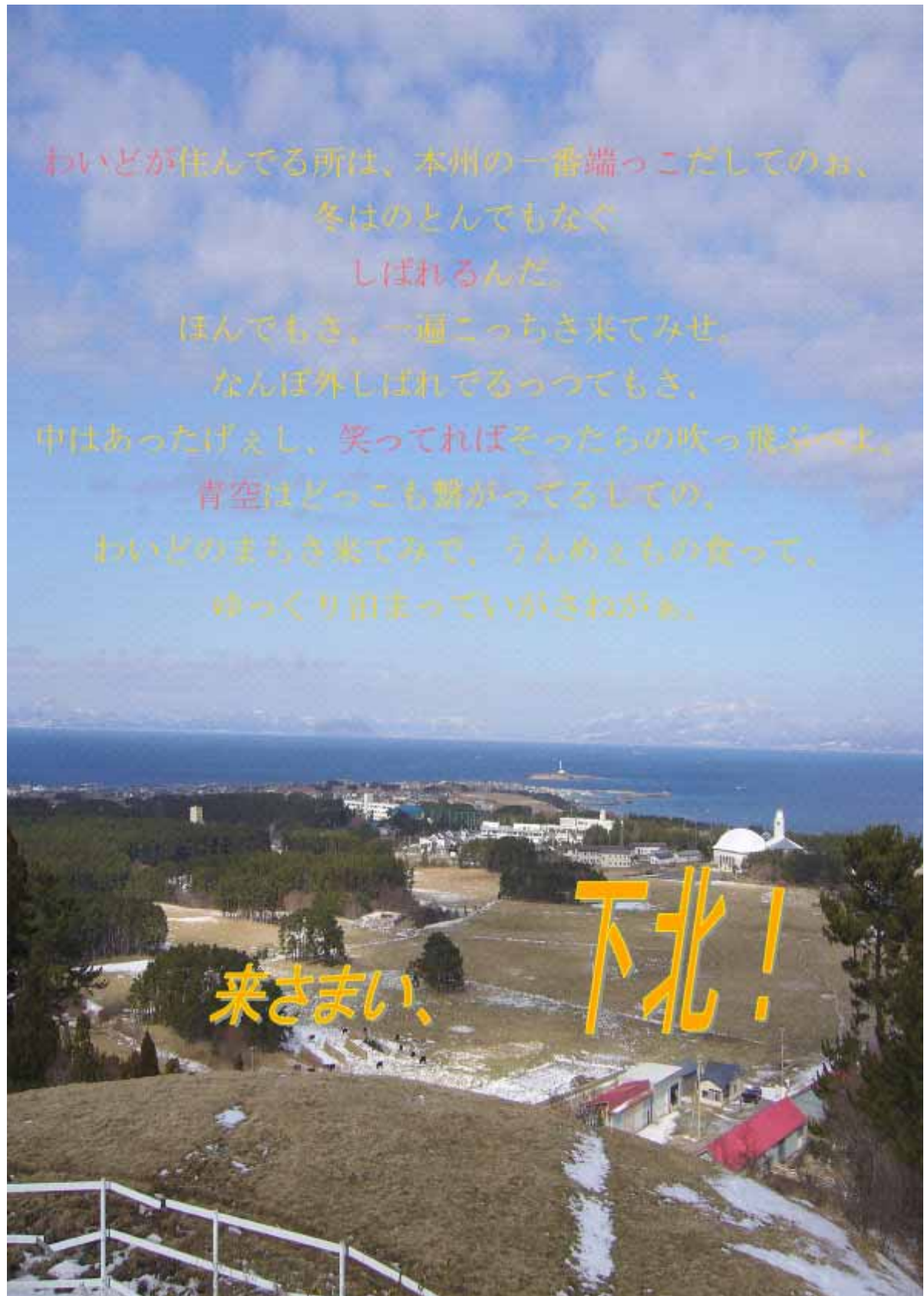


新鮮な海鮮と
心温まる郷土料理



下北に
逢いに
来ませんか？





わいどが住んでる所は、本州の一番端っこだしてのお、
冬はのとんでもなく
しばれるんだ。
ほんでもさ、一遍こっちさ来てみせ。
なんぼ外しばれでるつつてもさ、
中はあったげえし、笑ってればそったらの吹っ飛ぶべよ。
青空はどっこも繋がってるしての、
わいどのまちさ来てみで、うんめえもの食って、
ゆっくり泊まっていがさねがあ。



来さまい、 下北！



体験型観光メニューは
いかがですか？

- ・ クロツイ餅やり
- ・ よもぎ餅・ ぼおり餅作り、
ホタテ貝の開き方体験
- ・ アニマルトラック
- ・ 釜臥山スキー場

下北・脇野沢が待っています。



森・海・人
満天！脇野沢!!!

北限に棲むサルや、やさしいっほいのかっちゃん達、
自然豊かな脇野沢へ旅してみませんか？



(来た)

北 れ、挑戦者！

必勝祈願ツアー

- 願掛け岩を拝む
- 十割そば打ち体験
- 郷土料理を楽しむ
- 下北名物「一球入魂かぼちゃ」を食す
- 冬季限定極寒ツアー！

地吹雪体験

津軽海峡荒波体験

雪山探検

温泉

海鮮 BBQ



下北だけの
冬の楽しみ…

